

Vākyapadīya 「〈能成者〉詳解」(Sādhanasamuddeśa)の研究 ——VP3.7.45–54: 〈目的〉(karman) 論序——

小川 英世

0. バルトリハリは、Vākyapadīya 第3巻第7詳解所謂「〈能成者〉詳解」(Sādhanasamuddeśa)において、パーニニ文法学の kāraka 理論における〈行為〉(kriyā)に相関した〈行為〉を実現するものとしての kāraka (〈行為実現者〉、〈行為参与者〉)、すなわち〈能成者〉(sādhana)を論じている。同詳解は、総計167詩節からなり、以下のような構成となっている。

VP3.7.1–44	〈能成者〉一般論
VP3.7.45–89	〈目的〉(karman)
VP3.7.90–100	〈手段〉(karaṇa)
VP3.7.101–124	〈行為主体〉(kartr)
VP3.7.125–128	〈原因〉(hetu)
VP3.7.129–135	〈受益者〉(saṃpradāna)
VP3.7.136–147	〈起点〉(apādāna)
VP3.7.148–155	〈基体〉(adhikaraṇa)
VP3.7.156–162	〈残余〉(śeṣa)
VP3.7.163–164	〈呼びかけ〉(sambodhana)
VP3.7.165–167	〈能成者〉能力論

バルトリハリが VP3.7.45–164 を kāraka を表示する名詞接辞 (vibhakti) すなわち kārakavibhakti の順序に対応して構成しているのが見て取れるであろう。〈目的〉は、A2.3.2 karmaṇi dvitīyā により第二格接辞 (dvitīyā) の意味であり、〈手段〉と〈行為主体〉は A2.3.18 kartṛkaraṇayos tṛtīyā により第三格接辞 (tṛtīyā) の意味である。なお〈原因〉は A1.4.55 tatprayojako hetuś ca により、使役者である〈行為主体〉に与えられる術語である。さらに、〈受益者〉は A2.3.13 caturthī saṃpradāne により第四格接辞 (caturthī) の意味、〈起点〉は A2.3.28 apādāne pañcamī により第五格接辞 (pañcamī)

の意味、〈基体〉は、A2.3.36 saptamy adhikaraṇe ca により第七格接辞 (saptamī) の意味である。kārakavibhakti は第二格接辞から第五格接辞、そして第七格接辞である。〈残余〉は A2.3.50 ṣaṣṭhī śeṣe により第六格接辞 (ṣaṣṭhī) の意味であり、パーニニがこの規則の「〈残余〉」によって意図しているのは〈行為〉とそれを実現する kāraka の関係以外の関係 (sambandha) 一般である¹。第一格接辞 (prathamā) は A2.3.46 prātipadikārthalingaparimāṇavacanamātre prathamā、A2.3.47 sambodhane ca により、名詞語幹の意味 (prātipadikārtha) だけ (mātra)、性だけ、量だけ、数だけが表示されるべきとき、さらにある語が〈呼びかけ〉において使用されるときに導入される。第一格接辞は原則として kārakavibhakti ではない。

筆者はすでに小川 [2000] において VP3.7.1–44 の「〈能成者〉一般論」を扱った。本稿が取り上げるのは、〈目的〉論題の導入部にあたる十詩節である。バルトリハリは当該部において〈行為〉を実現する kāraka としての〈目的〉の特質を詳細に検討している。以下にそれら十詩節を挙げる。

[1. A1.4.49 に基づく〈目的〉の三種性・他の〈目的〉術語規則に基づく〈目的〉の四種性]

VP3.7.45: nirvartyaṃ ca vikāryaṃ ca prāpyaṃ ceti

¹バルトリハリは、kāraka を七種に区分する。〈行為主体〉〈目的〉〈手段〉〈受益者〉〈起点〉〈基体〉、そして〈残余〉である。〈残余〉は kāraka として意図されない kāraka として第七番目の kāraka である。VP3.7.45.0 及び注 24 を見よ。

tridhā matam /
tatrepsitatamaṃ karma carturdhānyat tu kalpitam //
「それら [一般的に kāraka と呼ばれるもの] のうち、[〈行為主体〉が自己の〈行為〉を通じて] 最も得ようとするものが〈目的〉(karman) と呼ばれる。[そしてその〈目的〉は] 〈実現対象〉(nirvartya)、〈変容対象〉(vikārya)、〈到達対象〉(prāpya) と呼ばれる三種に区分されると考えられる。一方、他の [〈目的〉] は四種に区分されると考えられる」

[2. 他の〈目的〉術語規則に基づく〈目的〉四区分]

VP3.7.46: anudāsīnyena yat prāpyaṃ yac ca kartur anīpsitam /
saṃjñāntarair anākhyātaṃ yad yac cāpy anyapūrvakam //
「[それら他の〈目的〉術語規則に基づく四種の〈目的〉のうち、まず第一の〈目的〉は A1.4.50 が規定する] 関心を寄せることなく到達されるべき [〈目的〉] であり、さらに [第二の〈目的〉は同じく A1.4.50 が規定する] 〈行為主体〉が得ようとする望まない [〈目的〉] であり、[第三の〈目的〉は、A1.4.51 が規定する、〈目的〉] という術語とは異なる [kāraka] 術語によって言及されない [〈目的〉] であり、[第四の〈目的〉は、その他の〈目的〉術語規則によって規定される] 他 [の kāraka 術語] に先行される [〈目的〉] である」

[3. 〈実現対象〉(nirvartya)]

VP3.7.47: satī vāvidyamānā vā prakṛtiḥ pariṇāminī /
yasya nāśrīyate² tasya nirvartyatvaṃ pracakṣate //
「それについて変容するものである〈根本因〉(prakṛti) が存在していても認められないもの、あるいは、それについて変容するものである〈根本因〉が存在しないが故に認められないもの、そのようなものをひとびとは〈実現対象〉と呼ぶ」

[4. 〈変容対象〉(vikārya)・学術が両対象に別様の解釈を与えること]

VP3.7.48: prakṛtes tu vivakṣāyāṃ vikāryaṃ kaiścid anyathā /
nirvartyaṃ ca vikāryaṃ ca karma śāstre pradārśitam //
「一方、〈根本因〉が [変容するものとして] 表現しようとする意図される場合には [〈根本因〉は] 〈変容対象〉である。
[ところで] あるもの達は、〈実現対象〉と〈変容対象〉という〈目的〉を彼らの学術 (śāstra) において別様に提示している」

[5. 〈実現対象〉学術的定義・〈変容対象〉の学術的定義二様性]

²Rau: nāśrīyate. Iyer の読みに従う。

VP3.7.49: yad asaj jāyate sad vā janmanā yat prakāśyate /
tan nirvartyaṃ vikāryaṃ ca karma dvedhā vyavasthitam //

「[すなわち、学術では] 非有 (asat) にして生ずるもの、あるいは有 (sat) にして生起 (janman) によって顕現せしめられるものが〈実現対象〉 [たる〈目的〉] であり、そして〈変容対象〉たる〈目的〉は二様に確立される」

[6. 〈変容対象〉学術的定義]

VP3.7.50: prakṛtyucchedasambhūtaṃ kiṃcit kāṣṭhādibhasmavat /
kiṃcid guṇāntarotpattyā svarṇādivikāravat //
「[二種の〈変容対象〉のうち] あるものは、薪等の灰のように、〈根本因〉の断滅から生起し、またあるものは、金塊の変容態のように、別の性質の獲得から知られる」

[7. 〈到達対象〉(prāpya) 定義]

VP3.7.51: kriyākṛtaviśeṣāṇāṃ³ siddhir yatra na gamyate /
darśanād anumānād vā tat prāpyam iti kathyate //
「そこに〈行為〉によってもたらされた特性が成立していることが知覚によっても推理によっても理解されないものが〈到達対象〉と呼ばれる」

[8. 〈到達対象〉における〈行為〉所産の特性の存在を認める見解の提示]

VP3.7.52: viśeṣalābhāḥ sarvatra vidyate darśanādibhiḥ /
keṣāṃcit tadabhivyaktisiddhir drṣṭiviśādiṣu //
「ある者たちの見解では、知覚等の [〈行為〉] によって特性が獲得されることがすべてのものに見出される。眼に毒を有する [蛇] 等の場合には、[その見る等の〈行為〉によって対象に] その [特性] が顕現することが確立されている」

[9. 〈到達対象〉の特性は〈行為〉の所産ではなく〈行為〉の実現要因]

VP3.7.53: ābhāsopagamo vyaktiḥ sodhatvam iti karmaṇaḥ /
viśeṣāḥ prāpyamāṇasya kriyāsiddhau vyavasthitāḥ //
「〈顕現の獲得〉(ābhāsopagama)、顕示 (vyakti)、適性 (sodhatva) という到達される〈目的〉の特性は〈行為〉の実現をもたらすものであると確立される」

[10. 〈目的〉の自己の〈行為〉に対する〈行為主体〉性と主要〈行為〉に対する〈目的〉性]

³Rau: kriyākṛtā viśeṣāṇām. Iyer: kriyāgataviśeṣāṇām. Pradīpa (on MBh ad A3.2.1)、Padamañjarī (on KV ad A1.4.49) が言及する当該詩節では kriyākṛtaviśeṣāṇām である。Raghunatha はこの読みを採用している。

VP3.7.54: nirvṛtyādiṣu⁴ tat pūrvam anubhūya svatantratām /
kartrantarāṇām vyapāre karma sampadyate tataḥ //
「その [〈目的〉] はまず実現行為 (nirvṛtti) 等の [自己の〈行為〉に対する] 自主性を享受して、その後で、[自己以外の] 別の [kāraka である] 〈行為主体〉の〈目的〉となる」

VP3.7.45–54 の上記十詩節においてバルトリハリは、まずパーニニの〈目的〉術語規則に従って〈目的〉を分類し、次に〈目的〉術語規則の中でも基本規則である A1.4.49 からパーニニ文法家が導き出す〈実現対象〉〈変容対象〉〈到達対象〉を定義し、さらに〈目的〉の kāraka としての特質を明示している。

以下本稿前半部においてバルトリハリの論点を明らかにし、後半部においてヘーラーラージャ (Helārāja) の注釈 Prakāśa の翻訳研究をテキストと共に提示する。テキストを提示するのは、ヘーラーラージャの「〈能成者〉詳解」章の注釈には欠落があり、それがプッララージャ (Phullarāja) によって補作されているばかりでなく、注釈刊本のテキストには種々の問題があり、訂正テキストの提示が内容の理解に不可欠と考えたからである。

1. 〈目的〉分類

バルトリハリが〈目的〉の分類と問題とする個別的〈目的〉の特質をめぐる議論において考慮しているパーニニの文法規則は以下の規則である。

A1.4.38 krudhadruhor upasamsṛṣṭayoḥ karma //
「動詞語根 *krudh* (「立腹する」)、*druh* (「悪意を抱く」) が *upasarga* (動詞接辞) と結びつくとき、怒りがむけられる [kāraka] は〈目的〉と呼ばれる」

A1.4.43 divaḥ karma ca //
「動詞語根 *div* (「賭事をする」) が表示する賭〈行為〉の [最有効因 kāraka は] 〈目的〉とも呼ばれる」

A1.4.49 kartur īpsitatamaḥ karma //
「〈行為主体〉が [自己の〈行為〉を通じて] 最も得ようと欲する [kāraka] は〈目的〉 (karman) と呼ばれる」

A1.4.50 tathāyuktaḥ cānīpsitam //

⁴Iyer, Rau は、*nirvartyādiṣu* の読みを採用するが、Rau が与える異読 *nirvṛtyādiṣu* が採用されるべきである。Raghu-natha もまた *nirvṛtyādiṣu* の読みを採る。

「それと同様に [すなわち、A1.4.49 によって〈目的〉と呼ばれるものと同様に〈行為〉と] 結びついている、[〈行為主体〉が] 得ようと欲するものではない [kāraka] あるいは中立的な [kāraka] は〈目的〉と呼ばれる」⁵

A1.4.51 akathitaḥ ca //

「[他の kāraka 術語を] 与えられない [kāraka] は〈目的〉と呼ばれる」

1.1. 〈行為主体〉が〈行為〉を通じて最も得ようと欲する〈目的〉

バルトリハリは、VP3.7.45 においてはこれらの規則のうち最も一般的な〈目的〉術語規則である A1.4.49 に規定される〈目的〉を〈実現対象〉 (nirvartya) ・〈変容対象〉 (vikārya) ・〈到達対象〉 (prāpya) の三種に区分している。次の文を見よ。

- [1] *ghaṭam karoti* (「彼は瓶を作っている」)
- [2] *śabdaḥ karoti* (「彼は音声を発している」)
- [3] *saṃyogaḥ karoti* (「彼は結びつけている」)
- [4] *mṛdaḥ ghaṭam karoti* (「彼は粘土を瓶にしている」)
- [5] *kāśān kaṭam karoti* (「彼はカーシャ草をマットにしている」)
- [6] *aṅgārān bhasma karoti* (「それは炭を灰にしている」)
- [7] *kāṣṭhāni bhasma karoti* (「それは薪を灰にしている」)
- [8] *suvarṇam kuṇḍalam karoti* (「彼は金を耳輪にしている」)
- [9] *vedam adhīte* (「彼はヴェーダ聖典を学習している」)
- [10] *ādityaḥ paśyati* (「彼は太陽を見ている」)
- [11] *nagaraḥ upasarpati* (「彼は町に近づいている」)
- [12] *grāmaḥ gacchati* (「彼は村に行く」)
- [13] *mātaraḥ smarati* (「彼は母親を思い出している」)

後ほど明らかにするように、何をもって〈実現対象〉とし、何をもって〈変容対象〉とするかに関しては、表現意図 (vivakṣā) や因果観というものが重要な決定要素となる。さしあたり、次のように言っておこう。

⁵A1.4.50 の *anīpsita* の否定辞 *an-* は排除否定 (*pariyudāsa*) である。よって得ようと欲するもの以外のものがその否定複合語によって指示される。得ようと欲するもの以外のものには、得ようと欲するものの反対遠ざけようと欲するもの (嫌悪対象) とそのいずれでもない中立的なものが含まれる。

[1]における瓶 (ghaṭa)、[2]における音声 (śabda)、[3]における結合 (samyoga) は、〈実現対象〉である。また、[4]における粘土 (mṛd)、[5]におけるカーシャ草 (kāśa)、[6]における炭 (aṅgāra)、[7]における薪 (kāṣṭha)、[8]における金塊 (suvarṇa) は〈変容対象〉である。そして[9]におけるヴェーダ聖典 (veda)、[10]における太陽 (āditya)、[11]における町 (nagara)、[12]における村 (grāma)、[13]における母親 (mātr) は〈到達対象〉である。

1.2. その他の〈目的〉

VP3.7.46 は、A1.4.49 以外の〈目的〉術語規則が提供する〈目的〉が四分類されることを述べている。次の文を見よ。

- [14] grāmaṃ gacchan vṛkṣamūlāny upasarpati (「彼は村に行く際に木の根に近づく」)
 [15] viṣam bhakṣayati (「彼は毒を食らう」)
 [16] caurān paśyati (「彼は泥棒を見る」)
 [17] odanaṃ bhakṣayati (「彼は粥を食べている」)

まず「関心を寄せることなく到達されるべき〈目的〉」とは、[14]における木の根 (vṛkṣamūla) である。[11]が示すようにその木の根はA1.4.49が規定する〈目的〉の〈到達対象〉としての〈目的〉であり得る。当然次の文が成立する。

- [18] vṛkṣamūlāny upasarpati (「彼は木の根に近づく」)

しかし[14]におけるそれは、〈到達対象〉ではあっても、志向対象 (uddeśya) でも嫌悪対象 (dveṣya) でもない中立的なもの (upekṣya) である。木の根にはたまたま接近するのである。このような〈到達対象〉はA1.4.50の適用領域である。

「〈行為主体〉が得ようと望まない〈目的〉」もまた同じくA1.4.50の適用領域であり、[15]の毒 (viṣa)、[16]における泥棒 (caura) がそれにあたる。毒や泥棒はまさしく嫌悪対象である。[17]における粥 (odana) がまさしく〈行為主体〉が得ようと望む〈目的〉であるのと対照的である。

「〈目的〉という術語とは異なる kāraka 術語によって言及されない〈目的〉」とはA1.4.51の適用対象である。

- [19] gām dogdhi payaḥ (彼は牛の乳を搾る)

この文における牛 (go) がそれにあたる。動詞語根 *duh* が意味する搾乳とは、牛から乳 (payas) を流出させること (kṣāraṇa) である。乳の流出に対して牛は〈起点〉 (apādāna) と呼ばれ得る。しかしそのことを考慮することなく、牛が単に搾乳に参加するものとして意図されるときに当該規則A1.4.51によって牛は〈目的〉と呼ばれる。

第四の「他の kāraka 術語に先行される〈目的〉」とは、[20][21]におけるデーヴァダッタ (devadatta)、[22]におけるさいころ (akṣa) である。

- [20] devadattam abhikrudhyati (「彼はデーヴァダッタに腹を立てる」)
 [21] devadattam abhidruhyati (「彼はデーヴァダッタに悪意を抱く」)
 [22] akṣān dīvyati (「彼はさいころで賭け事をする」)

デーヴァダッタはA1.4.38によって、さいころはA1.4.43によって〈目的〉と呼ばれる。さて、A1.4.38は先行する以下の規則の例外規則 (apavāda) である。

- A1.4.37 krudhadruherṣyāsūyārthānāṃ yaṃ prati kopāḥ //

「動詞語根 *krudh* (「腹を立てる」)、*druh* (「悪意を抱く」)、*īṣy* (「妬む」)、*asūya* (*asū + yaK*, A3.1.27) (「けなす」) の意味を有する動詞語根が使用されるとき、怒り (kopa) が向けられる対象 [である kāraka] は、〈受益者〉 (saṃpradāna) と呼ばれる」

[20][21]が表現する事態においてデーヴァダッタはこの規則の適用条件を満たしている。すなわち、この規則によって〈受益者〉と呼ばれる。A1.4.38はこの規則に対する例外規則として、〈受益者〉という術語適用の排除の上に自己の適用機会を得る。

A1.4.43は賭〈行為〉の最有効因 kāraka は、先行のA1.4.42 sādhatamam karaṇam によって〈手段〉 (karaṇa) と呼ばれるばかりでなく、〈目的〉とも呼ばれることを規定している。

2. 〈実現対象〉〈変容対象〉とは何か

2.1. 〈実現対象〉〈変容対象〉——一般的常識的理解

バルトリハリは〈実現対象〉〈変容対象〉に関して、学術 (śāstra) と世間の日常的言語活動 (loka) の両視点からそれらの特質を探る。まずバルトリハリは、日常的な言語活動のレベルでの世間の一般人の視点から〈実現対象〉、〈変容対象〉を説明する。このことは VP3.7.48 に両者に関して学術においては別様の定義が与えられると述べていることから明らかである⁶。

2.1.1. 〈実現対象〉

VP3.7.47 においてバルトリハリは以下の二つの場合に分けて〈実現対象〉を考える。

A. 変容する (pariṇāmin) 〈根本因〉 (prakṛti) が存在する場合

瓶は粘土を〈根本因〉すなわち質量因 (upādānakāraṇa) とする。瓶には粘土という〈根本因〉が存在するにも関わらず、その〈根本因〉が「認められない」 (nāśrīyate) すなわち「表現しようと思図されない」 (avivakṣā) とし、[1] のように表現される。この場合、瓶は〈実現対象〉とみなされる。

B. 変容する (pariṇāmin) 〈根本因〉 (prakṛti) が存在しない場合

[2] における音声 (śabda)、[3] における結合 (saṃyoga) は〈根本因〉をもたない。〈根本因〉が存在しないとき、それを表現しようと思図することはできない。[2][3] においてこのような音声、結合を〈実現対象〉と見なすことに困難はない。

2.1.2. 〈変容対象〉

VP3.7.48 においてバルトリハリは上記 A の場合に〈変容対象〉を定立する。

[4]–[8] はそれぞれ粘土、カーシャ草、炭、薪、金塊といった〈根本因〉を変容するものとして

⁶ヘーラーラージャによれば、世間と学術の対立は「世間の常識」 (lokapratīti) と「理論家の見解」 (tīrthikamata) の対立である。VP3.7.49.5 を見よ。

表現しようと思図している。この場合、粘土等の〈根本因〉は〈変容対象〉である。

[4] と以下の [23] あるいは [24] を比較しよう。

[23] *mr̥dā ghaṭam karoti* (「彼は粘土によって瓶を作っている」)

[24] *mr̥do ghaṭam karoti* (「彼は粘土に関係する瓶作成をおこなっている」)

[23][24] は〈根本因〉を変容するものとして表現しようと思図する表現とはみなされない。[23] においては〈根本因〉である粘土は〈手段〉として、[24] においては粘土は瓶を実現する〈行為〉に単に参与するものとして表現されている。[23] の場合には A1.4.42 により粘土は〈手段〉と呼ばれ、[24] においては関係一般を表示する第六格接辞が *mr̥d* の後に導入されている (A2.2.50)⁷。これらのことが示唆するのは、〈根本因〉を変容するものとして表現しようと思図するとは、〈根本因〉をその結果である変容態 (vikāra) と不異なるもの (abheda) として表現しようと思図することであるということである。

なお、ヘーラーラージャによれば、[4]–[8] においては、〈根本因〉である粘土等は直接的な〈変容対象〉であり、その変容態としての瓶等は、その〈根本因〉との不異性に基づいて間接的に〈変容対象〉とみなされる⁸。

2.2. 〈実現対象〉〈変容対象〉——学術的理解

バルトリハリが学術的視点から〈実現対象〉〈変容対象〉を考察するとき、因中有果論と因中無果論という因果論の視点を導入していることは明らかである。VP3.7.49 はそのことを端的に示している。「有なるものが生ずる」 (saj jāyate)、すなわち「有なるものが生起によって顕現せしめられる」という見解はまさしく因中有果論 (satkāryavāda) のものであり、一方、「非有なるものが生ずる」 (asaj jāyate) という見解は因中無果論 (asatkāryavāda) のものである。

⁷*mr̥dah* の第六格接辞が表示する関係を〈根本因〉と変容態の関係 (prakṛtīvikārabhāva) と解すれば、[28] は「彼は粘土の変容態である瓶を作っている」という意味となる。注 41 を見よ。

⁸VP3.7.50.2 を見よ。

ヘーラーラージャによれば、因中有果論における「生起」(janman)とは、顕現(prakāśana)に他ならない⁹。

2.2.1. 〈実現対象〉

〈実現対象〉は因果論の文脈では当然結果(kārya)である。したがって、〈実現対象〉は因中無果論の場合以下のC、因中有果論の場合Dにあたる。

- C. 非有にして生ずるもの
- D. 有にして生起(顕現)によって顕現せしめられるもの

ヘーラーラージャによれば、Cは一般的常識的理解に基づく〈実現対象〉Bに同じである¹⁰。Cと違ってDは以下の[25][26]の事例を説明することができる。

- [25] *putraṃ prasūte* (「彼女は息子を生む」)
- [26] *śabdāṃ prayunkte* (「彼は言葉を使用する」)

出産の場合、子供はすでに子宮内であってそれが分娩によって顕現せしめられ、言葉の使用の場合には、意図されている言葉、すなわち心的に把持され心中にすでにある言葉が使用によって顕現せしめられる¹¹。

ところでDに関し、バルトリハリは単に「有にして顕現せしめられる」とは言わず「有にして生起によって顕現せしめられる」と述べている。ヘーラーラージャによれば、この「生起」の言及には二つの意図がある。第一には、〈根本因〉とその結果との因果関係が前提されるということであり、結果的に[4]–[8]のように〈根本因〉がその結果と不異なるものとして表現しようとする場合に、〈根本因〉が〈変容対象〉であることが示唆される。この場合、〈根本因〉は〈変容対象〉、その結果は〈実現対象〉ということになる。一般的常識的理解で両者を考えた場合、〈根本因〉とその結果のいずれもが〈変容対象〉とみなされるのと対照をなす。

⁹VP3.7.49.4を見よ。

¹⁰VP3.7.49.3を見よ。

¹¹VP3.7.49.4を見よ。

第二には、有にして顕現せしめられる事例の中に顕現が生起を契機としない場合があるということである。[9]におけるヴェーダ聖典は永遠なるもの(nitya)であり、学習(adhyayana)によって顕現せしめられるものである。それは〈実現対象〉とも〈変容対象〉ともみなされない。

かくして、Dはあるものに〈根本因〉が存在し、その〈根本因〉が表現しようとする意図される場合、その場合に限り、そのものは〈実現対象〉とみなされるということを示唆する。Aの場合の〈実現対象〉、〈変容対象〉との定立の違いは明らかである¹²。

2.2.2. 〈変容対象〉

バルトリハリは、VP3.7.50において学術において定立される〈変容対象〉が次の二種であることを述べている。

- E. 〈根本因〉を断滅して生起する変容態
- F. 〈根本因〉の〈性質〉とは異なる〈性質〉が生起している〈根本因〉に他ならない変容態(〈根本因〉の変形としての変容態)

E、Fはそれぞれ、〈根本因〉の相が完全に失われる場合、換言すれば〈根本因〉が自己の本質(svarūpa)を放棄する場合と〈根本因〉の相が完全には失われない場合、すなわち自己の本質を放棄しない場合に対応する。[6]における炭を〈根本因〉とする灰(bhasman)という変容態、[7]における薪を〈根本因〉とする灰という変容態はEの変容態としての〈変容対象〉であり、[8]における金塊を〈根本因〉とする耳輪(kuṇḍala)、さらには[4]等における粘土を〈根本因〉とする瓶等はFの変容態としての〈変容対象〉である。

一般的常識的理解に従えば、〈根本因〉が変容態と不異なるものとして表現しようとする意図されない場合、変容態は〈実現対象〉となり、一方、〈根本因〉が変容態と不異なるものとして表現しようとする意図される場合、〈根本因〉も変容態も〈変容対象〉となる。これに対して、当該の〈変容対象〉観では、〈根本因〉が変容態

¹²これらの論点についてはVP3.7.49.5を見よ。

と異なるものとして表現しようと意図されない場合でも、変容態は〈変容対象〉である。すなわち、[1]における瓶も〈変容対象〉とみなされる。

ところでヘーラーラージャによれば、以下の[27]–[29]のように〈根本因〉だけが言及される場合がある。

- [27] *kāṣṭhāni dahati* (「それは薪を燃やす」)
 [28] *kāṇḍāni lunāti* (「彼は枝を切り落とす」)
 [29] *carma karoti* (「彼は革製品を作っている」)

この場合には含意される変容態との不異性に基づいて、〈根本因〉は〈変容対象〉とみなされる。[27]における薪も、[28]における枝(*kāṇḍa*)も(枝を折って矢を作る場合)、[29]における皮(*carman*)も間接的な〈変容対象〉である。以下の文を見よ。

- [30] *suvarṇam kuṇḍale bhavataḥ* (「金塊が左右の耳輪になる」)

当該の〈変容対象〉観では、〈根本因〉が〈変容対象〉とみなされるのは[30]の*bhavataḥ*という双数形が変容態を〈行為主体〉とすることの結果であることから明らかなように、変容態を通じてである¹³。

なおFの変容態は、一般的常識的理解に基づく〈変容対象〉観からも〈変容対象〉とみなすことができる。その場合には変容態は〈根本因〉との不異性に基づく間接的な〈変容対象〉である¹⁴。

3. 〈到達対象〉とは何か

[9]におけるヴェーダ聖典、[10]における太陽(*āditya*)、[11]における町(*nagara*)、[12]における村(*grāma*)、[13]における母親(*mātr*)が〈到達対象〉とみなされることはすでに述べた。

〈到達対象〉とは何か。VP3.7.51によれば次のように定義される。

¹³注53を参照せよ。

¹⁴上記より、変容を意味する *vi-kr*に「変容を加える」という意味と「変容を通じてあるものを実現する」という意味の二重の意味があることが理解される。

「〈行為〉によってもたらされた特性 (*kriyākṛta-viśeṣa*) の存在が知覚によっても推理によっても理解されない〈目的〉が〈到達対象〉である」

それでは、「〈行為〉によってもたらされた特性」とは何か。

3.1. 特性

ヘーラーラージャによれば、[1]における〈実現対象〉としての瓶、[4]における〈変容対象〉としての粘土、[18]における〈到達対象〉としての太陽に関してそれぞれ次のような表現が成立する¹⁵。

- [31] *ghaṭo nirvartate* (「瓶が実現しつつある」)
 [32] *mṛd vikurute* (「粘土が変容しつつある」)
 [33] *āditya ābhāsam upaiti* (「太陽が顕現 (*ābhāsa*) を得ている」)
 [34] *ādityaḥ prakāśate* (「太陽が顕現している」)
 [35] *ādityo viśayabhāvam āpadyate* (「太陽が対象性を得ている」)

これらの表現は、瓶が実現(*nirvṛtti*)という〈行為〉、粘土が変容(*vikriyā*)という〈行為〉、太陽が顕現の獲得(*ābhāsāpatti*, *ābhāsopagama*)、顕現(*prakāśa*)、対象性の獲得(*viśayabhāvopagama*)という〈行為〉の担い手であることを示している。*kāraka*理論では、これらの〈行為〉は〈目的〉としての瓶等に固有なそれら自身の〈行為〉〈ハタラキ〉(*svavyāpāra*)である¹⁶。そして、バルトリハリが〈目的〉に存在する特性として意図しているものこそは、まさしくこれらの〈目的〉に存するそれ自身の〈行為〉の結果としての実現、変容、顕現(*ābhāsa*, *prakāśa*)あるいは対象性(*viśayabhāva*)に他ならない。こうして〈実現対象〉における特性とは実現であり、〈変容対象〉における特性とは変容であり、〈到達対象〉における特性とは顕現あるいは対象性である。

3.2. 特性の付与と特性による〈行為〉の実現

これらの特性のうち、あるものは「〈行為〉によってもたらされたもの」(*kriyākṛta*)であり、

¹⁵VP3.7.54.2を見よ。

¹⁶VP3.7.54.2を見よ。

また他のあるものはそうではない。ここにバルトリハリは〈到達対象〉定立の根拠を見出す。

[1]、[4]、[10]の事態に関して次のようなパラフレーズが可能である。

- [36] *ghaṭam nirvartayati* (「彼は瓶をして実現せしめている」)
 [37] *mrdam vikārayati* (「彼は粘土をして変容せしめている」)
 [38] *ādityam ābhāsam upāyayati* (「彼は太陽をして顕現 (ābhāsa) を得さしめている」)
 [39] *ādityam prakāśayati* (「彼は太陽をして顕現せしめている」)
 [40] *ādityam viṣayabhāvam āpādayati* (「彼は太陽をして対象性を得さしめている」)¹⁷

[1]、[4]、[10]の事態にはまさにこのような使役構造があるのである。この使役構造においては、すでに〈行為〉が起こっているものが使役される¹⁸。[1]の場合は、実現しつつある瓶が使役され、[4]の場合は、変容しつつある粘土が使役され、[10]の場合には顕現している太陽が使役される。そしてここで注意しなければならないのは、[1]の場合には、実現しつつある瓶を使役することによって瓶に実現がもたらされる、[4]の場合には、変容しつつある粘土を使役することによって粘土に変容がもたらされると言うことができるのに対して、[10]の場合には、顕現している太陽を使役することによって太陽に顕現がもたらされると言うことはできないことである¹⁹。このことがバルトリハリがVP3.7.51において〈実現対象〉と〈変容対象〉

¹⁷以下の規則は使役文において[31]–[35]の〈行為主体〉が〈目的〉と呼ばれることを規定している。A1.4.52 *gati-buddhipratyavasānārthaśabdakarmākarmakāṇām aṇi kartā sa nau* (「進行 (gati)、知 (buddhi)、飲食 (pratyavasāna) を意味する動詞語根、音声を〈目的〉とする動詞語根、〈目的〉をもたない動詞語根のNiC (使役接辞) を後続しない場合の〈行為主体〉は、それらがNiCを後続する場合、〈目的〉と呼ばれる」)

¹⁸VP3.7.126: *dravyamātrasya tu praiṣe pṛcchyāder loḍ vi-dhīyate / sakriyasya prayogas tu yadā sa viṣayo ṇicah* // (「しかしながら、単なる〈実体〉に対する〈促進〉が表示さるべきとき、*pracch* (「尋ねる」) などの[動詞語根]の後に、LOT (命令法動詞接辞) が導入される。一方、〈行為〉を有するものが使役されるとき、その[使役]はNiCの対象である」)「使役」とは被使役者をして被使役者の〈行為〉遂行を休止させないことである。

¹⁹バルトリハリによれば、顕現や光照は部分化されない。すなわちそれは連続的に生起する部分的〈行為〉の構成体ではない。VP2.93d: *nirbhāgasya prakāśasya /*

に存する特性を想定してそれを「〈行為〉によってもたらされた特性」(*kriyākṛtavīṣeṣa*)と呼び、またVP3.7.53において〈顕現の獲得〉すなわち獲得される顕現、その他の〈到達対象〉に特有な特性を〈行為〉の実現の因とする理由である。顕現している太陽を使役することにおいて成り立つ知覚〈行為〉の結果はその太陽の知覚知である。

ところで、[10]や[13]の場合のように知覚や想起といった認識〈行為〉に対するその〈目的〉を〈到達対象〉とする場合、認識〈行為〉に対する〈目的〉に顕現あるいは対象性が存在することは容易に説明がつく。しかしながら、同じく〈到達対象〉に分類される[11]における町や[12]における村という〈目的〉に関して顕現あるいは対象性はどのように説明されるのであろうか。ヘーラーラージャによれば、[12]における村は、進行〈行為〉の〈行為主体〉がそこに到達しようと意欲するその意欲の対象であり (*samīhāviṣayīkṛta*)、その意欲知に顕現するもの (*avabhāsamāna*) である²⁰。進行〈行為〉の〈目的〉の場合、その〈到達対象〉としての〈目的〉に存する顕現あるいは対象性の結果は、進行〈行為〉の実現、すなわち、村への到着あるいは村と進行者の結合 (*saṃyoga*) である。この結合は進行〈行為〉に対して「それによってもたらされたもの」である。

バルトリハリによれば、〈目的〉には〈行為〉と関係する特性が存在し、〈実現対象〉と〈変容対象〉の場合にはその特性は〈行為〉によってもたらされるものであり、〈到達対象〉の場合には特性は〈行為〉を実現する要因である。

ヘーラーラージャのように、村と進行者の結合を進行〈行為〉によってもたらされた村という〈到達対象〉に存する特性とみなすことは可能である²¹。ヘーラーラージャが「〈行為〉によってもたらされた特性」を〈到達対象〉にも求めた結果である。しかしバルトリハリのVP3.7.53は〈到達対象〉の特性を〈顕現の獲得〉等の三者に限定していることを軽視してはならないであ

²⁰VP3.7.53.3を見よ。

²¹VP3.7.51.5を見よ。

ろう。明確にバルトリハリは〈到達対象〉の特性を〈実現対象〉と〈変容対象〉の特性と区別している。

3.3. 〈到達対象〉の諸特性

VP3.7.53 は、〈到達対象〉の特性を三つ挙げる。(1)すでに述べた〈顕現の獲得〉すなわち獲得される顕現、(2)その顕現を可能にする顕示 (vyakti)、(3)〈目的〉として〈行為〉を実現する可能性あるいは適性 (sodhatva) である。知覚〈行為〉に即して言えば、(1)は、知覚対象の知覚可能な場の獲得 (yogyadeśāpatti)、すなわち、知覚対象が知覚可能領域にあることであり、(2)は、知覚対象が障害物によってその顕現を阻害されていないことであり、(3)は端的に知覚可能性を意味する。すでに述べたように、これらの〈到達対象〉の特性はそれに関与する〈行為〉を実現するものである²²。

[10] に関してこれらの特性を考えてみよう。太陽の知覚を成立せしめるためには、まずもって太陽は知覚可能性をもっているものでなければならない。さらに雲に太陽が隠れては太陽を見ることはできない。そして決定的に重要なのは、太陽は知覚の対象とならない限り、太陽の知覚を成立せしめることができないということである。この知の対象となるということ (viṣayabhāva) が顕現を獲得するということなのである²³。バルトリハリによれば、知に太陽が顕現することによってはじめて太陽が見られるということが成立する。〈到達対象〉と他の二種の対象を比較した場合、〈到達対象〉は現存するものであるのに対して、〈実現対象〉と〈変容対象〉の場合の変容態は〈行為〉の実現過程において現存しない。この違いが〈到達対象〉の特性を他の対象の特性から分ける根拠である。そもそも現存しないものに「到達する」ことはできない。

3.4. 特性の確定

バルトリハリは、VP3.7.51 において〈到達対象〉においては〈行為〉によってもたらされた

²²VP3.7.53.2 を見よ。

²³注 62 を見よ。

特性の存在は知覚によっても推理によっても理解されないと述べた。〈到達対象〉には特性が存在する。そのうち〈顕現の獲得〉、顕現、〈適性〉という特性は〈行為〉によってもたらされる特性ではなく、〈到達対象〉を〈行為〉の〈能成者〉たらしめる要素である。これら以外に、特性として〈行為〉によってもたらされる特性が〈到達対象〉に存在するとしても、それらは知覚によっても推理によっても確定されない。これが要点である。

しかしバルトリハリは続く VP3.7.52 において「ある者たちの見解」として〈到達対象〉に存在する〈行為〉によってもたらされた特性の存在が確定可能であるという説を提示する。この見解に従えば、〈到達対象〉という〈目的〉の範疇を〈実現対象〉や〈変容対象〉と別個に定立する必要はない。

当該詩節においてバルトリハリは以下のような推理の成立を意図していると考えられる。

[主張] 人の視覚作用は見る対象に特性を付与する。
[理由] 視覚作用であるから。
[喩例] 眼に毒を有する蛇の視覚作用のように。

ヘーラーラージャは、VP3.7.52 は、バルトリハリ自身が認める見解でないとして、その注釈において提示された見解に対する批判を展開している²⁴。興味深いのは、ヘーラーラージャが VP3.7.52 の背景に知覚の〈到達作用説〉 (prāpyakāritva) を想定している点である²⁵。この説では知覚器官は対象に到達して (prāpya) 何らかのものを対象に関して実現する (kārin) と考えなければならないであろう。ここで注目すべきはバルトリハリの VP1.82 に対する Vṛtti である。

「真つ暗闇の中に立っているこの人は、この世界では、光に補助されてはじめて、壺などの対象を

²⁴VP3.7.52.4 を見よ。

²⁵VP3.7.52.2 を見よ。そこにおけるヘーラーラージャの所説から次のような推理式を定式化できる。

[主張] 火元素からなる視覚器官はそれと結びついた対象に変容を加える。

[理由] 対象に到達して作用するものであるから。

[喩例] 眼に毒を有する蛇の眼のように。

認識する。この場合、眼は対象に到達してはじめて作用をなすとは考えない者たちにとっては、対象は、一般に、光によって補助されている[と考えられる]。しかし、[眼は]対象に到達して作用をなすとするならば、眼光線の補助が、眼と同種類の光照によってなされる」(赤松 [1998: 146])
26

対象の光による補助とは〈到達対象〉の三特性を挙げる VP3.7.53 においてバルトリハリが「顕示」(vyakti) という語によって意図しているものに相当する。このことは VP3.7.51 においてはバルトリハリが非〈到達作用説〉の見地から〈到達対象〉を規定し、続く VP3.7.52 では〈到達作用説〉の見地を視野に入れて〈到達対象〉の議論を展開していることを示しているであろう。〈到達対象〉のもつ特性として〈顕現の獲得〉を挙げるバルトリハリ認識論が明らかに表象主義的認識論である点にも留意さるべきである。

4. 〈目的〉の〈行為主体〉性と kāraka 性

kāraka はすべて主要〈行為〉に相関して従属的な自己の〈行為〉を実現することを通じて、主要〈行為〉を実現する。kāraka は自己の〈行為〉に対して〈行為主体〉であり、主要〈行為〉に対して、それぞれの役割に応じて個別的な〈目的〉といった kāraka となる。これは kāraka 理論の基本であり、そのことはすでに VP3.7.20–23 において指摘されている²⁷。バルトリハリが VP3.7.54 において意図していることは、〈目的〉と呼ばれる kāraka に固有な主要〈行為〉に相関した従属的な〈行為〉とは何かということである。すでに述べたように、〈実現対象〉に固有な〈行為〉とは、実現〈行為〉であり、〈変容対象〉に固有な〈行為〉とは変容〈行為〉であり、〈到達対象〉に固有な〈行為〉とは顕現〈行為〉である²⁸。

²⁶Vṛtti on VP1.82: ihālokānuṅgrhītaṃ ghaṭādiviṣayaṃ santamase 'vasthito 'yaṃ pratipadyate / tatra yeṣāṃ aprāpyakāri cakṣuṣ teṣāṃ ālokena viṣayaḥ prāyeṇānuṅgrhyate / prāpyakāritve tu cakṣuṣas tulyajātīyena tejasā nayanaraśmyānugrahaḥ kriyate //

²⁷注 72、さらに小川 [2000: 552–553] を見よ。

²⁸§3.1 を見よ。

VP3.7.45–54 注釈和訳研究

*ヘーラーラージャの注釈 Prakāśa には部分的に欠落があり、プッララージャがその欠落を埋める形で補作している。区別が必要と思われる部分では特記している。特記されていない部分はヘーラーラージャによる注釈である。定本としたのは Iyer [1963] である。

VP3.7.45

[VP3.7.45.0(Phullarāja)] karmādibhedena saptabhedabhinnaṃ tāvat kārakam uddiṣṭam / atha tadanukrameṇa karma tāvat saṅkhyābhedapradarśana-pūrvakam vyākhyātum āha /

[Phullarāja] [先行詩節において] まず、〈目的〉等に区分されることに基づき相互に区分される七種の kāraka に言及された²⁹。さて今から、その [kāraka の一定の] 配列順序に従い、先ず〈目的〉について [その種類の] 数的区分を先に明示してから [その後でそれらの特質を] 説明するために、[バルトリハリは次の詩節を] 述べる。

VP3.7.45: nirvartyaṃ ca vikāryaṃ ca prāpyaṃ ceti tridhā matam /

tatrepsitatamaṃ karma carturdhānyat tu kalpitam // 「それら [一般的に kāraka と呼ばれるもの] のうち、[〈行為主体〉が自己の〈行為〉を通じて] 最も得ようと欲するものが〈目的〉(karman) と呼ばれる。[そしてその〈目的〉は] 〈実現対象〉(nirvartya)、〈変容対象〉(vikārya)、〈到達対象〉(prāpya) と呼ばれる三種に区分されると考えられる。一方、他の [〈目的〉] は四種に区分されると考えられる」

[VP3.7.45.1(Phullarāja)] kārakaviśeṣanirdeśaś ca vibhaktyanukramānusāreṇa pradarśitaḥ / sūtreṣu tu vipratīṣedhaparibhāṣāṃ anurudhyāpādānādikrameṇoktam / tatra vibhaktayaḥ svaujasamādyāḥ /

ところで、特定 kāraka についての教示は、本書では vibhakti (名詞接辞) の配列順序に従って明示されている。しかし、規則集 [Aṣṭādhyāyī] においては、A1.4.2 vipratīṣedhe paraṃ kāryam という解釈規則に従って〈起点〉(apādāna) [〈受益者〉(saṃpradāna)]

²⁹VP3.7.44: sāmānyam kārakam tasya saptādyā bheda-yonayah / ṣaṭ karmākhyādibhedena śeṣabhedas tu saptamī // ([〈行為〉を実現するものは] 一般的に 'kāraka' と呼ばれる。それには主要な七種の差別化を生み出す因 (bhedayoni) がある。[その差別化の因は] 『目的』('karman') などの呼称の区別に応じて六種あり、第七番目の [因] は、『残余』('śeṣa') という個別 [的] 呼称である) 「七種の kāraka」とは、〈行為主体〉〈目的〉〈手段〉〈受益者〉〈起点〉〈基体〉、そして〈残余〉すなわち〈無意図〉(avivakṣā) である。詳細は小川 [2000: 582–583; note 75] を見よ。ここではプッララージャは〈行為主体〉の下位分類としての〈原因〉を考慮していない。

等の順で [kāraka が] 言及されている³⁰。その場合、vibhakti は *sU*、*au*、*Jas*、*am* 等である³¹。

[VP3.7.45.2(Phullarāja)] *kārakam abhihitam anabhihitam ca bhavati / tatra prathamābhihitakāraka-vibhaktiḥ prātipadikārthamātra eva vidhīyate / dvitīyādayaś ca sarvā anabhihite kārakavibhaktaya ity ekaprakramatvād dvitīyādyarthānusāreṇaivopakramate /*

kāraka には、[文を構成する他の項目によって] すでに表示されている [kāraka] といまだ表示されていない [kāraka] とがある。そのうち、[他の項目によって] すでに表示されている kāraka を表示する vibhakti が第一格接辞 (prathamā) であり、ただ単に名詞語幹の意味だけが表示さるべきときにそれは導入される。

[他の項目によって] いまだ表示されていない [kāraka] が表示されるべきときに [導入される] kāraka を表示する vibhakti が第二格接辞 (dvitīyā) を初めとするすべての vibhakti である³²。

したがって、一定の対称性を守るために、まさに第二格接辞等の意味に随順して [個々の kāraka の説明をここに] 始める。

[VP3.7.45.3(Phullarāja)] *dvitīyādyarthaś ca karmādiḥ / yad uktam karmaṇi dvitīyā ityādi³³ / ataḥ karmaṇa evātau vyākhyāvasaraprāptā /*

そして、第二格接辞等の意味は〈目的〉等である。そのことは [パーニニによって] A2.3.2 *karmaṇi dvitīyā* (「〈目的〉が表示さるべきとき第二格接辞が導入される」) 等と述べられている。このような理

³⁰ 個別的 kāraka の術語を規定する諸規則は、支配規則 A1.4.1 *ā kaḍārād ekā samjñā* の支配下にあり、この規則によって所与のものに二つの術語が適用可能な場合には一つの術語 (*ekasamjñā*) が適用される。その術語選択の基準が二つの規則が適用可能なときに後続規則が優先適用されることを規定するこの解釈規則である。

例を挙げよう。*dhanuśā śarair vidhyati* (「彼は弓によって矢で [標的を] 射抜く」) においては弓 (*dhanus*) は矢の発出に対して〈起点〉であると同時に射抜という〈行為〉に対しては最有効因であるから、A1.4.24 *dhruvam apāye 'pādānam* により〈起点〉 (*apādāna*) という術語を得ると同時に A1.4.42 *sādhakatamaṃ karaṇam* により〈手段〉 (*karaṇa*) という術語を得る。当該解釈規則は、後続規則である A1.4.42 の適用を求める。したがってこの場合弓は〈手段〉とのみ呼ばれ、*dhanus* の後には A2.3.18 *karṭṭkaraṇayos tṛtīyā* により第三格接辞が起こる。

³¹ A4.1.2 *svaujasamauṭchaṣṭābhyāmbhisnebhyaśnasibhyāmbhyasnasosāmnyossup* // この規則に言及される *sU* 等の名詞接辞は A1.4.104 *vibhaktiś ca* により *vibhakti* と呼ばれる。

³² A2.3.2 *karmaṇi dvitīyā* といった *kāravibhakti* 導入規則は A2.3.1 *anabhihite* (「*x* が表示されていないとき」) の支配下にある。

³³ A2.3.2

由から、まさに〈目的〉が先ず最初に説明の機会を得る。

[VP3.7.45.4(Phullarāja)] *tatra kartuḥ kriyayā yad īpsitatamaṃ āptum iṣyamānatamaṃ tad eva lakṣaṇam prathamāsūtranirdiṣṭam / karma tridhā tribhiḥ prakāraiḥ nirvartyavikāryaprāpyarūpair bhinnam anekāntavan³⁴ nirdiṣṭam boddhavyam //45//*

その [〈目的〉] については、〈行為主体〉が [自己の] 行為を通じて最も得ようと欲するもの、すなわち、獲得しようと最も欲するものというまさにその特質が [A1.4.49 *kartur īpsitatamaṃ karma* という] 最初の規則によって教示されている。

[この規則によっては] 〈目的〉が、〈実現対象〉〈変容対象〉〈到達対象〉というように三様に、すなわち三種に区分されるものとして、一義性をもたないものとして [包括的に] 教示されていると理解しなければならない。

VP3.7.46

[VP3.7.46.0(Phullarāja)] *atha³⁵ anyat sūtrāntaranirdiṣṭam api bhedayitum³⁶ āha—caturdhānyat tu kalpitam iti³⁷ katham ity āha /*

さて、別の規則によって教示されている他の [〈目的〉] も区分するために [バルトリハリは]、*caturdhānyat tu kalpitam* (「一方、他の [〈目的〉] は四種に区分されると考えられる」と述べている。どのように [他の [〈目的〉] は四種に区分されると考えられるのかバルトリハリは次の詩節で] 述べる。

VP3.7.46: *anudāsīnyena yat prāpyaṃ yac ca kartur anīpsitam / samjñāntarair anākhyātam yad yac cāpy anyapūrvakam //*

「[それら他の〈目的〉術語規則に基づく四種の〈目的〉のうち、まず第一の〈目的〉は A1.4.50 が規定する] 関心を寄せることなく到達されるべき [〈目的〉] であり、さらに [第二の〈目的〉は同じく A1.4.50 が規定する] 〈行為主体〉が得ようと望まない [〈目的〉] であり、[第三の〈目的〉は、A1.4.51 が規定する、「〈目的〉」という術語とは] 異なる [kāraka] 術語によって言及されない [〈目的〉] であり、[第四の〈目的〉は、その他の〈目的〉術語規則によって規定される] 他 [の kāraka 術語] に先行される [〈目的〉] である」

³⁴ Iyer: *anekāntavarn*. R: *anekāntivan*. Iyer の *anekāntavarn* は誤植である。

³⁵ Iyer: *athā* は誤植である。

³⁶ Iyer: *bhedāyitum* の誤植訂正。

³⁷ 冒頭語 *atha* を論題提示の語とし、この一節は VP3.7.46 の導入部をなすものと理解する。Iyer 本では *iti* の後に二重ダングが置かれる。

[VP3.7.46.1(Phullarāja)] audāsīnyena tātasthyena yat prāpyam / yathā grāmaṃ gantur vṛkṣamūlādi / tathā yat kartur anīpsitam coraviṣādi / etat tathāyuktaṃ cānīpsitam³⁸ iti³⁹ dvitīyasūtranirdiṣṭaṃ tāvad dvividham / tathā ca yenaiva prakāreṇa kartur īpsitatamaṃ tenaiva cet anīpsitam īpsitād anyad dveṣyaṃ viṣādi, itarac ca yad audāsīnyena prāpyaṃ vṛkṣamūlādy uktaṃ /

「関心を寄せることなく (audāsīnyena = tātasthyena) 到達されるべき [〈目的〉]」とは、例えば村に向けて進行中の者にとっての木の根等であり、さらに「〈行為主体〉が得ようと望まない [〈目的〉]」とは泥棒や毒等である。これらは、まずもって A1.4.50 tathāyuktaṃ cānīpsitam という第二規則によって教示される二種 [の 〈目的〉] である。そしてそのような場合、[当該規則が意味するところは次のとおりである。]

〈行為主体〉が最も得ようと欲するものが [〈行為〉と結びつく] 結びつき方と全く同じその結びつき方で [〈行為主体〉が] 得ようと欲するもの以外のもの (anīpsitam = īpsitād anyat) [が 〈行為〉と結びつく] とするならば、[その 〈行為主体〉が得ようと欲するもの以外のもの]、すなわち毒等の嫌悪対象 (dveṣya) とそれ以外のもの、すなわち関心を寄せることなく到達されるべき木の根等の 〈到達対象〉 [は 〈目的〉と] 呼ばれる⁴⁰。

[VP3.7.46.2(Phullarāja)] tathā saṃjñāntaraiḥ apādānādisaṃjñābhir anākhyātam api kriyānimittam / etad akathitam ca iti⁴¹ tṛtīyasūtranirdiṣṭaṃ veditavyam /

さらに「[〈目的〉という術語とは] 異なる [kāraka] 術語によって言及されない [〈目的〉]」とは、〈起点〉等の術語によって言及されないとしても 〈行為〉の根拠 [すなわち kāraka] であるものである。この [〈目的〉] は A1.4.51 akathitam ca という第三規則によって教示されていると理解すべきである。

[VP3.7.46.2(Phullarāja)] tathā yad yac cāpy anyapūrvakam iti / anyat kārakaṃ pūrvaṃ yasya / yathā devadattam abhikrudhyati, devadattam abhidruhyati iti / atra hi krudhadruhor upasrṣṭayoḥ karma ity⁴² anena krudhadruhor upasrṣṭayoḥ upasargasambandhayoḥ yaṃ prati kopah tat kārakaṃ pūrvasūtreṇa

³⁸Iyer: ca nīpsitam を訂正。

³⁹A1.4.50

⁴⁰KV on A1.4.50: yena prakāreṇa kartur īpsitatamaṃ kriyayā yujyate tenaiva cet prakāreṇa yad anīpsitam yuktaṃ bhavati tasya karmasaṃjñā vidhīyate / īpsitād anyat sarvam anīpsitam—dveṣyam itarat ca / viṣaṃ bhakṣayati, caurān paśyati / grāmam gacchan vṛkṣamūlāni upasarpati /

⁴¹A1.4.51

⁴²A1.4.38

saṃpradānasaṃjñam api karmasaṃjñam eva bhavati / tathākṣān dīvyatīty atra divaḥ karma ca ity⁴³ anena divaḥ sādhatamaṃ yat pūrvasūtreṇa karaṇasaṃjñam eva karmasaṃjñam bhavati //46//

さらに [バルトリハリは] yad yac cāpy anyapūrvakam (「他 [の kāraka 術語] に先行される [〈目的〉]」) と述べている。anyapūrvaka という複合語は bahuvrīhi であり、「他の kāraka を先行者とするもの」という意味である。

例えば、例として devadattam abhikrudhyati (「彼はデーヴァダッタに腹を立てる」)、devadattam abhidruhyati (「彼はデーヴァダッタに悪意をいだく」) を挙げよう。実にこれらの例においては、A1.4.38 krudhadruhor upasrṣṭayoḥ karma というこの規則により、動詞語根 krudh (「腹を立てる」)、druh (「悪意をいだく」) が upasarga と結びついた (upasrṣṭa = upasargasambandha) 場合、怒りがむけられる kāraka は、先行規則 (A1.4.37 krudhadruherśyāsūyārthānāṃ yaṃ prati kopah) によって 〈受益者〉という術語を得るとしても、まさに 〈目的〉と呼ばれる。

さらに、akṣān dīvyati (「彼はさいころで賭事をする」) というこの事例においては、A1.4.43 divaḥ karma ca というこの規則によって、賭 〈行為〉に対する卓越した能成者 (sādhatama) として先行規則 (A1.4.42 sādhatamaṃ karaṇam) によってまさに 〈手段〉という術語を得る [kāraka が] 〈目的〉と呼ばれる。

VP3.7.47

[VP3.7.47.0(Phullarāja)] atha nirvartyādi trividham uddiṣṭaṃ vyākhyātum āha /

さて次に、[バルトリハリは] 枚挙した 〈実現対象〉等の三種の [〈目的〉について] 説明するために [次の詩節を] 述べる。

VP3.7.47: satī vāvidyamānā vā prakṛtiḥ pariṇāminī /

yasya nāśrīyate tasya nirvartyatvaṃ pracakṣate //

「それについて変容するものである 〈根本因〉 (prakṛti) が存在していても認められないもの、あるいは、それについて変容するものである 〈根本因〉が存在しないが故に認められないもの、そのようなものをひとびとは 〈実現対象〉と呼ぶ」

[VP3.7.47.1(Phullarāja)] yasya nirvartyamānasya ghaṭādeḥ prakṛtiḥ satī vā yathā mṛdādikā, avidyamānā vā yathā śabdasaṃyogādeḥ⁴⁴ pariṇāminī abhedena nāśrīyate mṛdaṃ ghaṭaṃ karotītyādyevamrūpatayā

⁴³A1.4.43

⁴⁴Iyer: śabdaḥ saṃyogādeḥ. Raghunatha: śabdasya saṃyogādih. 修正案 śabdasaṃyogādeḥ を提案する。

na vivakṣyate, kiṃ tarhi, mṛdā ghaṭaṃ karotītyādi-
bhedenaiṃ / yadā prakṛtyā saha vivakṣā tadā tan
nirvartyaṃ karma pracakṣate karmavidaḥ //

実現されるものである瓶等には例えば粘土等の〈根本因〉があり、[同じく]例えば音声や結合 (saṃyoga) 等といった [実現される] ものには〈根本因〉は存在しない。[まずもって] 変容するもの (pariṇāmin) としての〈根本因〉が [存在しないものは実現対象であり]、あるいは [存在しても結果と] 不異なるものとして認められない (nāśriyate)、すなわち、*mṛdāṃ ghaṭaṃ karoti* (「彼は粘土を瓶としている」) といったこのような形をとるものとして意図されるのではなくて (na vivakṣyate)、*mṛdā ghaṭaṃ karoti* (「彼は粘土によって瓶を作っている」) 等といった [表現に示されるように] まさに [結果と] 異なるものとして意図されるならば、[その〈根本因〉を有するものは実現対象である]。[このように〈根本因〉が存在するものの場合] 〈根本因〉と [それとの差異が] 意図されるとき、そのものを〈目的〉に精通した者たちは実現対象としての〈目的〉と呼ぶ⁴⁵。

⁴⁵ このプッララージャ注釈部テキスト部分は、それ自体としては読解が困難である。以下のカイヤタ (Kaiyata)、ナーゲーシャ (Nāgeśa) の当該詩節解釈を参照して訳を与えている。

Pradīpa on MBh ad A3.2.1 (III.220):
yasyopādānakāraṇaṃ nāsti tan nirvartyaṃ, yathā-
saṃyogaṃ karotīti / yasyāpi sad apy upādānakāraṇaṃ
na vivakṣyate tan nirvartyaṃ—yathā ghaṭaṃ karotīti / yadā
tūpādānakāraṇaṃ eva pariṇāmitvena vivakṣyate—mṛdāṃ
ghaṭaṃ karotīti, tadā vikāryaṃ karma / bhedavivakṣāyāṃ
tu mṛdā ghaṭaṃ karotīti nirvartyaṃ eva karma / (「質量因
(upādānakāraṇa) をもたないもの、それは〈実現対象〉
である。例えば *saṃyogaṃ karoti* (「彼は〈結合〉をもた
らしている」、「彼は結びつけている」) [における〈結
合〉である]。また、質量因が現に存在していても表現
しようとは意図されないもの、それも〈実現対象〉であ
る。例えば *ghaṭaṃ karoti* (「彼は瓶を作っている」) [に
おける瓶である]。しかしながら、*mṛdāṃ ghaṭaṃ karoti*
(「彼は粘土を瓶にしている」) というように、まさに質量
因が変容者 (pariṇāmin) として表現しようと思図される
場合には [その同じ瓶は] 〈変容対象〉としての〈目的〉
である。反対に *mṛdā ghaṭaṃ karoti* (「彼は粘土によっ
て瓶を作っている」) というように [質量因のその結果た
る瓶との] 差異が表現しようと思図されるならば、〈目
的〉たる [瓶は] 〈実現対象〉に他ならない」)

Uddyota on MBh ad A3.2.1 (III.220): yasya satī pari-
ṇāminī prakṛtir nāśriyate yasya vāvidyamānā tan nirva-
rtyam ity ucyata ity arthaḥ / tad evāha—yasyeti / kārya-
sāmānādhikarānyena pratīyamānaṃ nāstīty arthaḥ / *yathā
mṛdāṃ ghaṭaṃ karotīti / vivakṣyata iti / kāryābhedeneti
śeṣaḥ / tadā vikāryaṃ karmeti / avasthādvayānugamena
pūrvākāraparityāgenākārāntaraprāptyavagamād iti bhāvaḥ
/ bhedavivakṣāyāṃ iti / karmaṇaḥ sakāśād upādāna-
sya bhedavivakṣāyāṃ ity arthaḥ / mṛdā ghaṭaṃ iti /
karaṇatvavivakṣāyāṃ tṛtīyā / no cet sambandhasāmānya-
vivakṣāyāṃ mṛdo ghaṭaṃ iti ṣaṣṭhīti bodhyam / [*yathā

VP3.7.48

[VP3.7.48ab³.0(Phullarāja)] vikāryaṃ vyākhyātum
āha—

〈変容対象〉について説明するために [バルトリ
ハリは以下の詩節を] 述べる。

VP3.7.48ab³: prakṛtes tu vivakṣāyāṃ vikāryam /

「一方、〈根本因〉が [変容するものとして] 表現
しようと思図される場合には [〈根本因〉は] 〈変
容対象〉である」

[VP3.7.48ab³.1(Phullarāja)] prakṛteḥ kāraṇasya pari-
ṇāmitvena yadā vivakṣā kriyate mṛdāṃ ghaṭaṃ karoti,
kāśān kaṭaṃ karoti, aṅgārān bhasma karoti ityādi tadā
vikāryaṃ karma pracakṣate /

mṛdāṃ ghaṭaṃ karoti (「彼は粘土を瓶にしてい
る」)、*kāśān kaṭaṃ karoti* (「彼はカーシャ草をマッ
トにしている」)、*aṅgārān bhasma karoti* (「彼は炭
を灰にしている」) といったように、〈根本因〉とい
う原因が変容するものとして表現しようと思図され

mṛdāṃ ghaṭaṃ karotīti は、*yathā ghaṭaṃ karotīti* と訂正
されるべきであろう。] (「変容するものである〈根本因〉
が現にあっても認められないもの、あるいはそのような
〈根本因〉が存在しないもの、それらは〈実現対象〉と呼
ばれるという意味である。まさにそのことを [カイヤタ
は] *yasya* というように述べる。[「質量因をもたないも
の」とは] 結果と基体を同じくするものとして理解され
る [質量因] がないものという意味である。

『例えば *ghaṭaṃ karoti*』に関して。『表現しようとは意
図され [ない]』 ([*na*] *vivakṣyate*) という表現に『結果と
不異なるものとして』 (*kāryābhedena*) という文句が補足
されるべきである。

『・・・場合には [その同じ瓶は] 〈変容対象〉としての
〈目的〉である』 (*tadā vikāryaṃ karma*) に関して。二つの
状態 (*avasthādvaya*) が随伴するが故に、先の形相 (*ākāra*)
が放棄されることによって他の [後の] 形相が獲得され
ると理解されるからという意である。

『差異が表現しようと思図されるならば』
(*bhedavivakṣāyāṃ*) に関して。〈目的〉と質量因の
差異が表現しようと思図されるならばという意味である。

『*mṛdā ghaṭaṃ karoti*』に関して。[質量因が] 〈手段〉
として表現しようと思図される場合には第三格接辞が起
こる。もしそうではなくて関係一般が表現しようと思図
されるならば、*mṛdo ghaṭaṃ [karoti]* というように第六格
接辞が起こると理解すべきである」)

なお、*mṛdo ghaṭaṃ karoti* における *mṛd* の後の第六格接
辞の導入は、VP3.7.53.1 において述べられる *mātuḥ smarati*
(「彼は母親の想起をなしている」) における *mātr* (「母親」)
の後の第六格接辞の導入と同じ理屈による。粘土と瓶作
製 (行為) の間には関係がある。その関係を〈行為〉と
kāraka の関係として捉えるとき、粘土は〈目的〉や〈手
段〉とみなされる。しかしその関係を関係一般として捉
え、両者が単に関係しているものとして理解するとき、関
係という意味をその導入条件とする第六格接辞が名詞語
幹 *mṛd* の後に導入される (A2.3.50)。

るとき、[粘土等の〈根本因〉を] ひとつとは〈変容対象〉たる〈目的〉と呼ぶ⁴⁶。

[VP3.7.48b⁵cd.0(Phullarāja)] athāparasya matāntaropanyāsacchalena prakārabhedakathanavāncchayā nirvartyavikārye nirūpayitum āha—

さて次に、〈実現対象〉と〈変容対象〉について、あたかも他者の見解の提示であるかのように装いながらも [実際には] 別様にも [説明され得ることを] 述べようと意図して、[その別の観点から] それらを確定するために [バルトリハリは次のように] 述べる。

VP3.7.48b⁵cd: kaiścid anyathā /
nirvartyaṃ ca vikāryaṃ ca karma śāstre pradarsi-
tam //

[ところで] あるもの達は、〈実現対象〉と〈変容対象〉という〈目的〉を彼らの学術 (śāstra) において別様に提示している]

VP3.7.49

[VP3.7.49.0(Phullarāja)] katham ity āha—

[問] どのようにか。

[答] この疑念に対して [バルトリハリは次のように] 述べる。

VP3.7.49: yad asaj jāyate sad vā janmanā yat prakāśyate /

⁴⁶瓶等が〈変容対象〉なのではないかと考えられるかも知れない。しかしヘーラーラージャによれば、ここでバルトリハリが意図している〈変容対象〉は瓶等の〈根本因〉である。VP3.7.50.2に説明が与えられている。

さらに次の二文を見よ。

A. taṇḍulān odanaṃ pacati (「彼は米を煮て粥を作っている」)

B. taṇḍulānām odanaṃ pacati (「彼は米から粥を作っている」)

これらの表現をパタンジャリ [MBh ad A1.4.49] は次のようにパラフレーズする。

A'. taṇḍulān pacann odanaṃ nirvartayati (「彼は米を煮て粥を実現している」)

B'. taṇḍulavikāram odanaṃ nirvartayati (「彼は米の変容態である粥を実現している」)

さらにこれらのパラフレーズはカイヤタによって次のように再パラフレーズされる。

A''. taṇḍulān vikledayann odanaṃ nirvartayati (「彼は米を軟化させて粥を実現している」)

B''. taṇḍulānām sambandhinam vikāra viśeṣam viklityā nirvartayati (「彼は米の関係項である特定変容態を軟化作用によって実現している」)

パタンジャリがここでは米と粥の間に〈根本因〉と変容態の関係を想定していることが重要である。彼は米という〈根本因〉は軟化という変化を受けるものとして〈変容対象〉であり、一方変容態である粥は〈実現対象〉であると考えている。

tan nirvartyaṃ vikāryaṃ ca karma dvedhā vyavasthitam //

「[すなわち、学術では] 非有 (asat) にして生ずるもの、あるいは有 (sat) にして生起 (janman) によって顕現せしめられるものが〈実現対象〉[たる〈目的〉] であり、そして〈変容対象〉たる〈目的〉は二様に確立される」

[VP.3.7.49.1(Pullarāja)] yad asad vaiśeṣikādyanusāreṇa jāyate sāṅkhyamatenā sad eva vā jāyate tadubhayaṃ api janmanā prakāśyamānatvān nirvartyaṃ kathyate /

[Phullarāja] ヴァイシェーシカ学派等に従い非有にして生ずるものであろうと、サーンキヤ学派の見地に従いまさに有にして生ずるものであろうと、それらはいずれも生起を通じて顕現せしめられるものであるから〈実現対象〉と呼ばれる。

[VP.3.7.49.2(Pullarāja/Helārāja)] etad uktam bhavati / satkāryavādinām asmākaṃ nirvartyaṃ karmāstīti vaktuṃ pāryate / satī tasya prakṛtir bhavaty asatī vā / sarvathā janmanā prakāśyamānatvena nirvartyatvasya na kācit kṣatiḥ⁴⁷ /

[Helārāja →] sad asad vā janmanā yat prakāśyate tan nirvartyam /

[Phullarāja] 次のことが意図されている。〈因中有果論〉を主張する我々にとっても「〈実現対象〉たる〈目的〉がある」と主張することができる。その〔〈実現対象〉〕に〈根本因〉があろうとなかろうと、あるものが〈実現対象〉であるということは全面的に生起によってそれが顕現せしめられるものであるということに基づくということに如何なる咎もない。

[Helārāja →] 有なるものであろうと非有なるものであろうと、およそ〈生起〉によって顕現せしめられるものは〈実現対象〉である。

[VP3.7.49.3(Helārāja)] asaj jāyate ity avidyamānaprakṛteḥ karmaṇo⁴⁸ nirvartyamānatā pūrvoktaivānūdītā /

[Helārāja] asaj jāyate (「非有にして生ずるもの」という表現によって、〈根本因〉が存在しない〈目的〉が〈実現対象〉であるという、まさに先に [VP3.7.47] において] 述べられたことが再言されている。

[VP3.7.49.4(Helārāja)] saj janmanā prakāśyate iti⁴⁹ ayam atra viśeṣaḥ / tadyathā putraṃ prasūte, śabdaṃ prayuṅkte ity atra kuṣṣisthasya sata eva putrasya vivakṣitasya ca śabdasya prasavaprayogābhyām

⁴⁷Iyer: na kācit na kṣatiḥ.

⁴⁸誤植 karmaṇā を訂正。

⁴⁹Raghunatha に従い、Iyer: asaj janmanā prakāśyate iti を訂正。

prakāśanam / sataḥ prakāśanam hi janmātra vivakṣitam /

[Helārāja] *saj janmanā prakāśyate* (「有にして<生起>によって顕現せしめられるもの」と [バルトリハリは] 述べている。

ここには次のような違いがある。例えば、*putraṃ prasūte* (「彼女は息子を産む」)、*śabdāṃ prayunkte* (「彼は言葉を使用する」) といったこれらの事例においては、子宮にあってまさに有なる息子が産出 (prasava) を通じて顕現せしめられ、さらに意図されて [心的に有なる] 言葉が使用 (prayoga) を通じて顕現せしめられる。実にこれらの事例においては、有なるものの顕現 (prakāśana) が <生起> であることが意図されている。

[VP3.7.49.5(Helārāja)] *janmagrahaṇena prakṛtivivakṣāyāṃ vikāryatām āha / anyathābhivyajyamānasya nirvartyakarmatābhāvam api janmagrahaṇenāha / tena vedam adhīte ityādaḥ vedāder adhyayanena prakāśyamānasya nirvartyakarmatābhāvāt*

*karmaṇi nirvartyamānavikriyamāṇe iti ced vedādhyāyādīnām upasaṃkhyānam*⁵⁰

*ity ucyate / itthaṃ ca prakṛtyarthavivakṣāyāṃ evaitan nirvartyaṃ karmoktam iti kaiścid anyathā iti saṅgatam*⁵¹ /

[Helārāja] [バルトリハリは *saj janmanā prakāśyate* において] 「生起」 (janman) という語を言及することによって、<根本因> が [その結果と不異なるものとして] 表現しようとする場合には、[<根本因> は] <変容対象> であるということ在意図している。

さらに、[生起ではなく、生起] 以外の別の方法で顕現せしめられるものは <実現対象> とはならないということも「生起」という語を言及することによって意図している。それゆえ、*vedam adhīte* (「彼はヴェーダ聖典を学習している」) 等の事例においては、学習によって顕現せしめられるヴェーダ聖典等は <実現対象> とはならないから、[カーティアーヤナは次のように] 述べている。

「A3.2.1 中の <目的> が実現対象あるいは変容対象であるならば、*vedādhyāya* (「ヴェーダ聖典を学習するもの」) 等に関して追加規定が定式化されるべきである」⁵²

⁵⁰Vt. 1 on A3.2.1; *karmaṇi nirvartyamānavikriyamāṇe ced vedādhyāyādīnām upasaṃkhyānam* //

⁵¹Iyer: *ity asaṅgatam*. R: *iti nāsaṅgatam*. 上記のように修正。

⁵²カイヤタによれば、常住なるヴェーダ聖典の学習において、ヴェーダ聖典が実現されるものであるということとはあり得ない。Pradīpa on A3.2.1 (III.221): *vedādhyāya iti / nityo vedāḥ sthita evādhyāyate iti nirvartyatvābhāvāḥ* /

そしてこのような場合、このように [〈生起〉によって顕現せしめられるもの] が <実現対象> としての <目的> と呼ばれるのは、<根本因> たる対象が表現しようとする場合に限られるから⁵³、「あるもの達は [学術において] 別様に [提示する]」 (VP3.7.48b⁵: *kaiścid anyathā*) と言うのは整合的である。

[VP3.7.49.6(Helārāja)] *tasmāt sadasatkāryavādimatābhedenaitad vyākhyeyam / pūrvam lokapratītyanusāreṇoktam / iha tu tīrthikamatāśrayeṇāpīti viśeṣaḥ* //49//

それゆえ、因中有果論者と因中無果論者の見解の相違に応じてこの [学術における <実現対象> の定立] は説明されるべきである。先行詩節 [VP3.7.47] においては世間の常識に従って [〈実現対象〉の特質が] 述べられたが、ここでは、理論家の見解に依拠しても [〈実現対象〉はこのように定義される]、という違いがある。

VP3.7.50

[VP3.7.50.0(Helārāja)] *vikāryaṃ ca karma dvedhā vyavasthitam / prativyakti lakṣaṇaṃ vaktuṃ vyaktibhedāḥ pūrvam uktaḥ / lakṣaṇam āha—*

さらに、<変容対象> たる <目的> は二様に存立する。個別的に特質を述べるために [VP3.7.49d] によって <変容対象> たる <目的> が 種別化されることがまず述べられた。[よって次の詩節によってバルトリハリは二種の <変容対象> の] 特質を述べる。

VP3.7.50: *prakṛtyucchedasambhūtaṃ kiṃcid kāṣṭhādibhasmavat / kiṃcid guṇāntarotpattyā suvarṇādivikāravat //*

「[二種の <変容対象> のうち] あるものは、薪等の灰のように、<根本因> の断滅から生起し、またあるものは、金塊の変容態のように、別の性質の獲得から知られる」

[VP3.7.50.1(Helārāja)] *niranvayavināśāt prakṛter ucchedaḥ / tadyathā kāṣṭhāder bhasmādi / kāṣṭhāni*

⁵³「彼は瓶を作っている」という文によって表現される事態は、「有にして <生起> によって顕現せしめられる」という見解 (因中有果論) では、<根本因> である粘土の中にすでに存在する有なる瓶が <生起> を通じて顕現せしめられると解釈される。当該の表現は必然的に「<根本因> たる対象が表現しようとして意図されている」表現である。この見解では、<生起> によって顕現せしめられるものの有たることを保証するために <根本因> の存在が必ず前提されるのである。なお、VP3.7.47 の <実現対象> 定立の論理では、瓶作製において瓶が <実現対象> とみなされるのは瓶の <根本因> である粘土が「認められない」、すなわち表現しようとして意図されない場合である。

bhasma karoti / pūrvavat prakṛtīvikārayoḥ kriyā-sambandho yojyaḥ /

〈根本因〉の[相の]断滅(uccheda)は[その相の]痕跡なき滅を根拠とする⁵⁴。[そして]例えば薪等の[相の断滅から]灰等が起こる。[この場合] *kāṣṭhāni bhasma karoti* (「それは薪を灰にしている」)[という表現が成立する]。先行の[VP3.7.48ab³/₈の与える〈変容対象〉の定義の]場合と同様、〈根本因〉[たる薪]と変容態(vikāra)[たる灰]はともに[両者の不異性を根拠として]〈行為〉に関係すると解釈されるべきである。

[VP3.7.50.2(Helārāja)] pūrveṇa tu lakṣaṇena nirvartyam etat karma prakṛter avivakṣāyām / vivakṣāyām tu vikāryam /

iha tv avivakṣāyām api prakṛtau bhasmādikāryam rūpaviśeṣād eva kāṣṭhādikam upamṛdyopajātam iti pratīter⁵⁵ vikāryam / pūrvatra tu prakṛtiḥ sāksād vikāryam karma, tadabhedena vikāro 'pi / iha tu sāksād vikāra eveti viśeṣaḥ /

ところで、[VP3.7.48ab³/₈の与える]先の[〈変容対象〉の]定義によれば、この[灰という]〈目的〉は、〈根本因〉が[それと不異なるものとして]表現しようと思図されない場合〈実現対象〉であり、反対に[〈根本因〉がそれと不異なるものとして]表現しようと思図される場合には〈変容対象〉である。

しかしながら、当該定義では、〈根本因〉[である薪等がその結果である灰等と不異なるものとして]表現しようと思図されない場合も、灰等の結果は、まさに特殊な本質(rūpaviśeṣa)に基づいて薪等[の相]を破壊して(upamṛdya)生起すると理解されるから〈変容対象〉である。

しかしながら先行[定義]の場合には、〈根本因〉が直接的に〈変容対象〉たる〈目的〉であり、その[〈根本因〉]との不異性に基づいて変容態もまた[間接的に〈変容対象〉たる〈目的〉となる]が、当該定義では、まさに変容態が直接的に[〈変容対象〉たる〈目的〉となる]という違いがある⁵⁶。

[VP3.7.50.3(Helārāja)] kāṣṭhāni dahatīti tu prakṛtir eva śabdavatī, sāmāthyagamyas tu vikāro bhasma / evaṃ kāṇḍāni lunāti, carma karotītyādau veditavyam /

⁵⁴ナーゲージャによれば、〈変容対象〉の二種性を説明する VP3.7.50 においてバルトリハリは、〈根本因〉の相が完全に放棄される場合と〈根本因〉の相が完全には放棄されない場合の二つの場合を想定している。Uddyota on MBh ad A3.2.1 (III.220): vikāryam apīti / pūrvārūpasya sarvātmanā parityāgatadabhāvābhyām ity arthaḥ / 〈根本因〉と変容態に関して「これはそれである」という再認識が成立する場合とそうでない場合と考えることができる。

⁵⁵誤植 *pratiiter* を訂正。

⁵⁶この場合〈根本因〉は変容態を通じて、変容態との不異性に基づいて、〈行為〉に結合するということになる。

ところで、*kāṣṭhāni dahati* (「[火は]薪を燃やしている」という事例においては〈根本因〉だけが言葉によって表示されており(śabdavat)、一方変容態である灰は言明効力から間接的に理解され得るもの(sāmāthyagamyā)である。*kāṇḍāni lunāti* (「彼は枝を折っている」)、*carma karoti* (「彼は革製品を作っている」)等の事例においても同様であると理解しなければならない。[これらの事例では含意されている変容態との不異性に基づいてこれらの〈根本因〉は間接的に〈変容対象〉である。]

[VP3.7.50.4(Helārāja)] kācit tu prakṛtir atyajantī svarūpaṃ saṃsthānāntarāpattyā vikṛtety ucyate iti guṇāntarasya sanniveśāder dharmasyotpattyopalakṣitam aparaṃ vikāryaṃ karma / tadyathā suvarṇaṃ kuṇḍale bhavata iti / asatkāryanaye yady apy atrāpūrvotpatīḥ tathāpi pratyabhijñānāl loka tattvādhyavasāyāt guṇāntaramātrāpattir ucyate / etac ca prakṛtīvivakṣāyām pūrvalakṣaṇenāpi saṅgrhītam //50//

一方で、〈根本因〉のうちのあるものは、別の形態(saṃsthāna)の獲得によって自己の本質(svarūpa)を放棄しないとき、「変容した」(vikṛta)と呼ばれるから、別の性質(guṇa)の参入等の属性(dharma)の生起によって[〈変容対象〉が]示唆される(upalakṣita)。[そのような〈変容対象〉が]さらなる〈変容対象〉たる〈目的〉である⁵⁷。例えば *suvarṇaṃ kuṇḍale bhavataḥ* (「金が両耳輪になる」という[場合の耳輪である])⁵⁸。

⁵⁷バルトリハリの本詩節における *guṇa* という語の使用の背景には、様態・形相等を含む広義の性質が変化しても実体(dravya)は自己同一性(tattva)を失わないという実体観がある。Ogawa [2005: §8] 参照。

また、ヘーラーラージャは、*guṇāntarotpattyā* の第三格接辞を A2.3.21 itthambhūtalakṣaṇe によるものと解している。

⁵⁸ヘーラーラージャはパタンジャリの以下の議論に基づいて当該詩節を注釈している。

MBh (Paspasā) [I.7.12–18]: mṛt kayācid ākrtyā yuktā piṇḍo bhavati / piṇḍākṛtim upamṛdya ghaṭikāḥ kriyante / ghaṭikākṛtim upamṛdya kuṇḍikāḥ kriyante / tathā suvarṇaṃ kayācid ākrtyā yuktam piṇḍo bhavati / piṇḍākṛtim upamṛdya rucakāḥ kriyante / rucakākṛtim upamṛdya kaṭakāḥ kriyante / kaṭakākṛtim upamṛdya svastikāḥ kriyante / punarāvṛttāḥ suvarṇapiṇḍaḥ punar aparayākṛtyā yuktaḥ khadirāṅgārasavarṇe kuṇḍale bhavataḥ / ākrṭir anyā cānyā ca bhavati, dravyaṃ punas tad eva / ākrṭyupamardena dravyam evāvaśoṣyate / (「粘土は何らかの形相(ākṛti)と結びついて塊となる。塊という形相を破壊して小水容器(ghatikā)が作られる。小水容器の形相を破壊して水差(kuṇḍikā)が作られる。それと同様に、金は何らかの形相と結びついて塊となる。塊の形相を破壊してネックレスが作られる。ネックレスの形相を破壊してブレスレットが作られる。ネックレスの形相を破壊してスヴァスティカー(卍)が作られる。再生された金の塊は再び別の形相と結びついてカディラ樹の炭と同色の一對の耳輪となる。形相は

〈因中無果論〉では、たとえこの場合には新規のものが生起している (apūrvotpatti) とみなされるとしても、「これはあれと同じである」という再認識 (pratyabhijñā) から同一性 (tattva) が判断されるから、世間では「ここには」単なる別の性質の獲得があるにすぎないと言われる⁵⁹。そしてこの〔変容対象〕は〈根本因〉が〔その結果と不異なるものとして〕表現しようとする場合には先の [VP3.7.48ab³ の与える〈変容対象〉の] 定義によっても包摂される⁶⁰。

VP3.7.51

[VP3.7.51.0] idānīm prāpyakarmalakṣaṇam āha—

さて次に、〈到達対象〉たる〈目的〉の定義を〔バルトリハリは〕述べる。

VP3.7.51: kriyākṛtaviśeṣānām siddhir yatra na gamyate /
darśanād anumānād vā tat prāpyam iti kathyate //

「そこに〈行為〉によってもたらされた特性が成立していることが知覚によっても推理によっても理解されないものが〈到達対象〉と呼ばれる」

[VP3.7.51.1] nirvartye karmaṇi nirvṛtīr ātmalābha eva kriyākṛto viśeṣo darśanāt pratyakṣād evāvadhāryate / vikārye tu bhasmakuṇḍalādaḥ vikāraḥ kriyākṛto viśeṣo 'vadhāryate pratyakṣeṇa / kvacit punar anumānād viśeṣāvāsāyo yathā paratra janitānām sukhādīnām mukhaprasādādīnā līṅgenāvāsāyah /

〈実現対象〉たる〈目的〉には、実現 (nirvṛti) すなわち自己獲得 (ātmalābha) に他ならない〈行為〉によってもたらされた特性 (viśeṣa) がまさに知覚 (darśana = pratyakṣa) に基づいて確定される。

一方、灰や耳輪等の〈変容対象〉には、〈行為〉によってもたらされた変容 (vikāra) という特性が知覚によって確定される。

それぞれ異なるが実体 (dravya) は同一である。形相の破壊を通じてまさに実体は一貫して持続する)

なお、パタンジャリが *suvarṇaṇḍī* *khadirāṅgārasavarṇe kuṇḍale bhavataḥ* という表現において *bhavataḥ* という双数形を使用していることに留意しなければならない。この双数形は〈根本因〉である金塊ではなく変容態である耳輪に属する数の反映である。このことは変容態が〈行為主体〉となる場合があることを示している。この問題は VP3.7.115 において取り上げられるであろう。

⁵⁹ 「彼は金塊を耳輪にしている」という場合、金の耳輪に関して「この耳輪は金である」という再認識が成立するであろう。

⁶⁰ したがって、この場合には、〈根本因〉である金塊が〈変容対象〉とみなされることにもとづいて間接的に耳輪が〈変容対象〉とみなされる。

またある場合には、推理に基づいて〔〈行為〉によってもたらされた〕特性が決定される。例えば、他者に生ぜしめられた楽等が喜色満面の顔等といった徴表から決定される⁶¹。

[VP3.7.51.2] jalāvasekādikriyāveśitāś ca vanaspatīnām viśeṣaḥ pratikalām avāptajanmā sūkṣmatvād utpattyanantaram anavaśyamānāś caramāvasthāyām pracitataraviśeṣadarśanād avadhāryate / na hy ayam pracitataro viśeṣo 'napekṣitakramo jhaṭity aśāṅkita evodetum prabhavatīti pratikṣaṇam anumīyamānaḥ sūkṣmarūpaḥ, tasya hi sūkṣmasya rūpasya duravadhāratvam / yathā ṣaḍjādisvaraviśeṣayo tārātītārayoḥ /

そして、樹木は散水等の〈行為〉によって特性を持つに至る。しかしその特性は部分毎に生起を得るから〔部分的特性の〕微細性の故に〔部分的特性の〕生起の直後には決定されない。それが確定されるのは最終段階でより増大した特性が知覚されるときである。なぜなら、このより増大した特性が、順序を期待することなく、たちどころに、思いがけずに生起するということはあり得ず、したがって刹那ごとに微細なる相をもつ〔部分的特性がある〕ことが推理されるからである。実にその微細なる相を有する〔部分的特性〕は決定しがたい。例えば、シャドジャ等の特定の音調であるターラ (高) 調やアティ・ターラ (超高) 調が決定しがたいように。

[VP3.7.51.3] tad evaṃvidho viśeṣo yatra kriyākṛto na saṃdrśyate tat kartuḥ kriyayā⁶² viśayabhāva-mātreṇepsitatamatvāt prāpyam karma / tadyathā ādityam paśyati, nagaram upasarpati, vedam adhīta ityādi /

かくして〈行為〉によってもたらされた以上のような類いの特性が見出されないもの、それは〈行為主体〉が、〈行為〉を通じて、単に対象性 (viśayabhāva) だけによって〔単なる対象として〕最も得ようと望むものであるから、〈到達対象〉たる〈目的〉である。例えば、*ādityam paśyati* (「彼は太陽を見ている」)、*nagaram upasarpati* (「彼は町に近づいている」)、*vedam adhīte* (「彼はヴェーダ聖典を学習して

⁶¹ ナーゲーシャも同様の解釈を提示している。Uddyota on MBh ad A3.2.1 (III.220–221): darśanād iti / pratyakṣād ity arthaḥ / nirvartye svarūpalābha eva kriyākṛto viśeṣo, vikārye vikārarūpa eva saḥ / ghaṭam karoti, svarṇam kuṇḍalam karoti, kāṣṭham bhasma karoti / anumānād yathā—putraḥ sukham karotīti / atra sukhārūpalābho mukhaprasādānumeyah /

ナーゲーシャが明示しているように、〈行為〉によってもたらされた特性が推理される事態とは、*putraḥ sukham karoti* (「息子は楽をもたらす」) といった文が表現する事態である。他者における楽の獲得は息子による楽の実現〈行為〉によってもたらされた特性である。

⁶² Iyer: *kriyāyā*. 誤植

いる)等 [における太陽、町、ヴェーダ聖典等の] ように。

[VP3.7.51.4] ādityādīnām hi samdarśanādikriyayā kaścīd āhito viśeṣo nāvadhāryate pramāṇābhyām / kriyāsambandhamātram tu lakṣyate, na ca sa eva viśeṣaḥ /⁶³ vṛtte kriyāsambandhe vastugatasya bhedasya nirvartyavikāryayor dṛṣṭatvāt /

実に、太陽等には見る等の〈行為〉を通じて何らかの特性が付与されるが、それは[知覚と推理のいずれの]認識根拠によっても確定されない。反対に、知られるのは[太陽等の見る等の]〈行為〉との関係だけである。そしてまさにその[〈行為〉との関係]は[ここで言う]特性ではない。なぜなら、〈実現対象〉と〈変容対象〉においては、〈行為〉との関係が起こってから[〈行為〉によってもたらされた]ものに属する差異(vastugata-bheda)が経験されるからである。[そのような差異が特性である。]

[VP3.7.51.5] nagare tu gamanakriyājanitaḥ samyogo dviṣṭho viśeṣo bhavann api nagarasya mahāparimāṇatvād alpaparimāṇena devadattena himavadaṅgulisaṃbandhavād alakṣyaḥ / pṛthivyekadeśāś ca svāvayavāpekṣayā kalpito viśiṣṭasvādheyādḥārūpo nagarāśabdavācyāḥ prasiddha eveti na kācid anupapattiḥ //51//

一方、「彼は町に近づいている」という場合 進行〈行為〉によって生ぜしめられた[町と進行者という]二項に存する結合(samyoga)が[〈到達対象〉である]町に存在する。しかし、町はその大きさの大なるものであるから、[それに比して]大きさの小なる[進行者]デーヴァダッタによっては、ヒマラヤ山と足指の関係と同様、その結合は知られ得ない(alakṣya)。そして「町」という語の表示対象が、大地自身の部分に相関して構想された、特定の[大地]自身にほかならない所依(ādheya)に対する基体(ādharma)である大地の一部であることは、まったく周知されていることであるから、何ら不都合はない⁶⁴。

⁶³Iyer: ādityādīnām hi samdarśanādikriyayā kaścīd āhito viśeṣo nāvadhāryate / pramāṇābhyām kriyāsambandhamātram tu lakṣyate, na ca sa eva viśeṣaḥ / punctuation に注意。

⁶⁴「町」という語の表示対象は概念的に構想されたものであり、それが指示するものは大地の一部である。実体として町が存在する訳ではない。「町がこの地域にある」「道が町にある」といった表現は町や道の大地に対する概念的設定を根拠とする。町と進行者の結合と言っても、実際には大地の特定地点と進行者の結合があるにすぎないのである。このことは町と進行者の結合が知られ得ないことのさらなる理由となる。

VP3.7.52

[VP3.7.52.0] nāsty eva prāpyaṃ karma, sarvatra kriyā-kṛtavīśeṣāvdhāraṇād iti kecit / tathā hi—

ある者たちは「〈到達対象〉たる〈目的〉というものはまったく存在しない。なぜなら、いかなるものにおいても〈行為〉によってもたらされた特性が確定されるからである」と主張する。すなわち、[彼らの考えは次のようである]。

VP3.7.52: viśeṣalābhaḥ sarvatra vidyate darśanādībhīḥ /

keṣāmcit tadabhivyaktisiddhir dṛṣṭiviśādiṣu //

「ある者たちの見解では、知覚等の[〈行為〉]によって特性が獲得されることがすべてのものに見出される。眼に毒を有する[蛇]等の場合には、[その見る等の〈行為〉によって対象に]その[特性]が顕現することが確立されている」

[VP3.7.52.1] darśanādikriyāhitaviśeṣalābho vikāraḥ sarvatra vidyate, saukṣmyāt tu nāvadhāryate sarveṇeti keṣāmcin matam / tasya viśeṣasya dṛṣṭau viṣaṃ yeṣāṃ teṣu tadviśaye 'bhivyakter niścayasya siddhiḥ / dṛṣṭiviśair ahibhir nirīkṣito hi viśayo jvalanajvālālīḍho lakṣyate / tatsādharṃyād anyatrāpi darśanādīnāhitāḥ kaścīd viśeṣo viśaye samunneyaḥ /

知覚等の〈行為〉によって付与される特性の獲得という変容はいかなる[〈目的〉]にも存在するが、しかしそれは微細性の故に誰でも[知覚的に]確定できるわけではないというのがある者たちの見解である。

そのような特性は、目に毒を有するものたちの領域では⁶⁵、顕現せしめられること(abhivyakti)、すなわち決定されること(niścaya)が確立される。

実に、眼に毒を有するもの(dṛṣṭiviśa)、すなわち蛇(ahi)によって見つめられた対象は、そこに火の炎がなめるように広がるのが見られる(lakṣyate)。それとの類似性(sādharṃya)から、他の場合も、知覚等によって付与された何らかの特性が対象に存すると推知さるべき(samunneya)である。

[VP3.7.52.2] taijasaṃ hi cakṣuḥ prāpyakārīti tena yukto viśayo 'vaśyaṃ vikriyate yathā dṛṣṭiviśadarśanena / iyāms tu viśeṣo dṛṣṭiviśe

⁶⁵ヘーラーラージャは、詩節中の dṛṣṭiviśādiṣu を dṛṣṭiviśeṣu としてまず dṛṣṭiviśa が bahuvrīhi であることを説明し、さらに、その複合語が第六格複数形であることを説明し、その第六格接辞が領域(viśya)の意味を表示することを説明している。眼に毒を有する蛇の知覚〈行為〉を推理の同類例(sādharṃyadrṣṭānta)とみなしていることがうかがえる。この同類例において確立される肯定的遍充関係は「知覚〈行為〉はすべてで知覚対象に変容をもたらすあるいは特性を付与する」である。

teja utkaṭaṃ viṣaśamparkād viṣayaṃ dahati, anyatra tanutarasthiti /

実に、火元素からなる視覚器官は、対象に到達して作用するもの (prāpyakārin) であるから、その[視覚器官]と結びついた対象は必ず変容を加えられる (vikriyate)。例えば眼に毒を有するものによって見られることにより [対象に変容が加えられる場合のように]。

しかしながら、これだけの違いがある。眼に毒を有する [蛇] の場合には、顕著となった火元素が毒と混合することから対象を焼き、他の場合には [すなわち普通の眼の場合には]、[火元素は] 非常にわずかにしか存しないので [対象を焼くことはないの] である。

[VP3.7.52.3] ādiśabdenāyaskāntādīnām grahaṇam / tatsannidhau lohaṃ bhramati / katakaphalasannidhau hi jalaṃ prasādatītyādāv asty eva kriyākṛto vikārah /

「[眼に毒を有するもの等] の」「等」(ādi) という語によって、磁石 (ayaḥkānta) 等が包含される。それが近接しているとき、鉄が動く。実に、水を澄ませるカタカの実が近接しているとき、*jalaṃ prasādati* (「水が澄んでいる」) 等と表現される事態には、[近接] 〈行為〉によってもたらされた変容がまさにある。

[VP3.7.52.4] etac ca na śāstrakārasya matam / keśāmcid ity anyamatatvenopanyāsāt /

しかしここにおいて述べられている見解は本論書の作者 [バルトリハリの] 見解ではない。なぜなら、「あるものたちの見解では」(keśāmcit) というように他者の見解として提示されているからである。

[VP3.7.52.5] kvacid viśeṣadarśane 'pi na sarvatra tathā bhāvo 'drśyamānaviśeṣe 'pi yuktaḥ /

[〈行為〉によってもたらされた] 特性が知覚される場合があるからといって、すべての場合に、特性が現に知覚されていないものにまで、[特性が知覚される] それと同じように [特性が] 存在するということは合理的ではない。

[VP3.7.52.6] kiṃ ca kriyāphale 'tra vikāro 'bhipretaḥ / paridrśyamānas tu viṣayo kriyāyā hetur na phalam / drṣṭivīṣādāv api tejaśsaṃyogād viṣaye vikāro na kriyā-balāt / evam ayaskāntāder vastusvabhāvo 'yaṃ na kriyākṛto vikārah kaścit / tasmād asty eva prāpyaṃ karma kriyākṛtopakārānapekṣam //52//

さらにここでは [瓶等の〈実現対象〉、灰等の〈変容対象〉といった] 〈行為〉の結果における [実現や変容といった] 変容が [バルトリハリによって] 意図されている。しかし、知覚される対象は、〈行為〉の原因ではあっても結果ではない。眼に毒を有するもの等の場合も、火 [元素] との結合から対象

に変容が起こるのであって [見るという] 〈行為〉の力によって起こるのではない。同様に、磁石等に基づいて [鉄が動くのは] これは [鉄という] ものの本質であって、[鉄には] 〈行為〉によってもたらされた変容は何ら見出されない。

それゆえ、〈行為〉によってもたらされる [変容に対する] 扶助を期待しない〈目的〉として〈到達対象〉がまさに存在する。

VP3.7.53

[VP3.7.53.0] na ced vikārayogaḥ prāpyakarmanāḥ katham asya kriyāsiddhāv āngabhāvaḥ sādhanatā-sampattiyarthāḥ / ucyate /

[反論] 〈到達対象〉たる〈目的〉が [実現や変容といった] 変容と結びつかないとするならば、どうしてこれに〈行為〉の実現に対する従属性があり得よう。〈行為〉の実現に対する従属性は、それが〈能成者〉となるのに資するものである⁶⁶。

[答論] 答えよう。

VP3.7.53: ābhāśopagamo vyaktiḥ soḍhatvam iti karmanāḥ /

viśeṣāḥ prāpyamāṇasya kriyāsiddhau vyavasthitāḥ //

「〈顕現の獲得〉(ābhāśopagama)⁶⁷、顕示 (vyakti)、適性 (soḍhatva)⁶⁸ という到達される〈目的〉の特性は〈行為〉の実現をもたらすものであると確立される」

[VP3.7.53.1] yogyadeśāvasthānena darśanapatham avatarati viṣaya itī yogyadeśāpattiḥ ābhāśopagamaḥ

⁶⁶ 瓶が実現不能のものであり、粘土が加工不能のものであるならば、瓶作製〈行為〉も粘土加工〈行為〉も実現不能であり、「粘土を瓶にする」と言うことはできないであろう。

⁶⁷ ヴリシャバデーヴァ (Vṛṣabhadeva) によれば「顕現の獲得」とは「対象性の獲得」(viśayabhāvopagama) である。Paddhati on Vṛtti ad VP1.3: ābhāśopagamaḥ, viśayabhāvopagamaḥ /

バルトリハリは、VP3.9.46において類似の表現として *nirbhāśopagama* という表現も用いている。またヘーラーラージャは、VP3.2.17-18 に対する注釈において無明を説明する際に *ābhāśopagama* という語を用いて次のように述べている。Prakāśa on VP3.2.17-18: etad eva hy avidyāyāḥ svarūpaṃ yad anupapadyamānam apy ābhāśopagamaṃ nayati, upapannatve vidyaiva syāt / (「実に説明不能のものにも〈顕現の獲得〉をもたらすというまさにこれは無明の本質である。もし [〈顕現の獲得〉をもたらすものが] 説明可能なものであるとするならば、それはまさに明知に他ならないであろう」)

⁶⁸ ヴリシャバデーヴァはこの「適性」を想起知の文脈で「対象性」(viśayabhāva) と言い換える。Paddhati on Vṛtti on VP1.84: soḍhatvam iti / smṛtibuddher ekasyā viśayabhāvam /

svabhāvād asya darśane upakāraḥ / योगyadeśa-
sthitasyāpi nīhārādīprakāśapratibandhakabhāvā-
bhāvādi pradīpādinimittā vyaktiḥ aṅgam⁶⁹ / viśyasya
prakāśayogyadeśasthitasyāsaty āvarake 'drśyasva-
bhāvaḥ piśācādir iti soḍhatvam, bodhakṣamatā,
drśyasvabhāvātāṅgam /

対象は、[知覚] 可能な場にいることによって知覚の道に入るから、「〈顕現の獲得〉」とは、[知覚] 可能な場を得ることである。[このような] 〈顕現の獲得〉は、本質的にこの [対象の] 知覚を扶助するものである。

[知覚] 可能な場にあるものにとっても、霧等の光照を阻害する存在の非存在等といったものである、灯明等を根拠とする顕示 (vyakti) が [その] 知覚に対する] 要因である。

光照可能な場にある対象は、悪鬼ピシャーチャ等はそれを覆うものがなくても知覚不能の本性を持つものであるから、「[知覚] 適性」(soḍhatva)、すなわち認識可能性 (bodhakṣamatā)、本質的知覚可能性 (drśyasvabhāvātā) を [知覚に対する] 要因とする⁷⁰。

[VP3.7.53.2] etair atīśayair darśane sādhanabhāvam
anubhavati prāpyaṃ karma / ete ca darśanakriyāhetavo
na tatkr̥tāḥ /

〈到達対象〉である〈目的〉は、これらの卓越性によって知覚に対する〈能成者〉性を享受する。そしてこれら [の卓越性] は、知覚〈行為〉の原因ではあってもその [〈行為〉] によってもたらされたものではない。

[VP3.7.53.3] grāmaṃ gacchatīyādāv api yathāyogaṃ
soḍhatvādayo grāmāder vācyāḥ / samīhāviśayīkṛtā hi
grāmādayo 'vabhāsamānā gamanādisahāḥ sādhayanti
gamanādikriyām / evam adhīyamānaṃ vedādi
adhyayanasaḥam⁷¹ / mātaraṃ smarātīty api mātā
kr̥topakārā krūrahḍdayasyāpi smṛtipatham anupatantī
sādhayati smṛtim / īpsitatamatvānapekṣāyāṃ tu

⁶⁹Iyer: nīhārādīprakāśapratibandhakabhāvābhāvādi-
pradīpādinimittā vyaktiḥ aṅgam. nīhārādīprakāśa-
pratibandhakabhāvābhāvādi pradīpādinimittā という複合
語では読解困難である。

⁷⁰Padamañjarī on KV ad A1.4.49: kārakatvaṃ tu prā-
pyasyābhāsopagamādibhiḥ, ādityo hy ābhāsam upagaccha-
ti, yato drśyate abhivyaktim upayāti, yato vyaktam upa-
labhyate saḥate ca darśanam, yataḥ śakyate draṣṭuṃ tad evā-
bhāsopagamaḥ, vyaktiḥ, soḍhatvam iti karmaṇo viśeṣāḥ prā-
pyamānasya kriyāsiddhau vivakṣitāḥ //

ハラダッタ (Haradatta) によれば、[10] の場合、太陽が顕現を獲得しているとき、太陽は知覚されているものであり、太陽が顕示を獲得しているとき、太陽は明晰に知覚されているものであり、さらに太陽が知覚に耐え得るとき、太陽は知覚可能なものである。

⁷¹Iyer: adhyamanasaḥam. 誤植である。

saṃbandhitvasāmānyavivakṣāyāṃ śeṣaśaṣṭhī mātuḥ
smaratīti //53//

grāmaṃ gacchati (「彼は村に行く」) 等においても、適宜、適性等が「村」等の [語の] 表示対象となる。実に、[到達] 意欲の対象とされている村等は、[知に] 顕現して進行等 [の〈行為〉] に耐え得るもの (gamanādisaha) となるとき、進行等の〈行為〉を実現する。

同様に、学習されるヴェーダ聖典等も学習に耐え得るもの (adhyayanasaḥa) であるから [学習等の] 〈行為〉を実現する。

mātaraṃ smarati (「彼は母親を思い出している」) という事例においても、母親は、[想起者に] 扶助を与えた者として、薄情なころの者にとってさえ [想起に耐え得るものであるから] 想起の道をたどって想起 [〈行為〉] を実現する⁷²。

一方、最も得ようと望まれるものであるということが考慮されない場合には、[想起に対する] 関係項であることが一般的に意図され、mātuḥ smarati (「彼は母親の想起をなしている」) というように A2.3.50 により残余を表示する第六格接辞が [mātṛ という名詞語幹の後に] 起こる⁷³。

VP3.7.54

[VP3.7.54.0] evaṃ tāvad⁷⁴ yathāvibhāgaṃ karma
lakṣitam / idaṃ tu vaktavyam—pūrvam uktaṃ guṇa-
kriyānām kartāraḥ sarve sādhanaviśeṣā iti / tat kathaṃ
karmatāsaṃbhava iti /⁷⁵ karmakarṭṛvicārapātanikāṃ
karoti /

まず以上のように区分に応じて〈目的〉が定義された。しかし次のことに答えられるべきである。すなわち、すべての特殊な〈能成者〉は従属的〈行為〉(guṇakriyā) の〈行為主体〉であるとすでに言われた⁷⁶。それなのにどうして〈目的〉であるということが可能なのか。karmakarṭṛの考察への導入を [バルトリハリは] 図る。

⁷²「彼は母親を思い出している」という文は「彼はなつかしく母親を思い出している」というニュアンスをもつことになる。

⁷³この場合は、感情抜きにただ単に母親が思い出されているというニュアンスとなる。

⁷⁴Iyer: tāvad. 誤植である。

⁷⁵Iyer にダンダなし。

⁷⁶VP3.7.18: niṣpattimātre kartṛtvaṃ sarvatraivāsti kārake / vyāpārabhedāpekṣāyāṃ karaṇatvādisambhavaḥ // (「まさにすべての〈行為参与者〉(kāraṇa) に、実現作用一般 (niṣpattimātra) に相関した〈行為主体性〉(kartṛtva) がある。[しかしながら実現作用の対象として] 個別的な〈ハタラキ〉が期待されるとき、[〈行為参与者〉は] 〈手段性〉(karaṇatva) などに [依拠して〈手段〉などと呼ばれ] 得る」) 小川 [2000: 552] を見よ。

VP3.7.54: nirvṛtṭyādiṣu tat pūrvam anubhūya svatantratām /

kartrantarāṇām vyapāre karma saṃpadyate tataḥ //

「その〔〈目的〉〕はまず実現行為 (nirvṛtti) 等の〔自己の〈行為〉に対する〕自主性を享受して、その後で、〔自己以外の〕別の〔kāraḥ である〕〈行為主体〉の〈目的〉となる」

[VP3.7.54.1] nirvṛttivikriyābhāsāpattikriyāsu yathāsaṅkhyam nirvartyavikāryaprāpyalakṣaṇam karma svāntaryaṃ kartṛtvam āsṛitya tadapekṣayānyeṣām nirvartyādikarmaviśayatvād bahūnām kartṛṇām nirvartanādivyāpāre praiśalakṣaṇe karma jāyate tenāpyamānatvāt /

〈実現対象〉と特徴付けられる〈目的〉、〈変容対象〉と特徴付けられる〈目的〉、〈到達対象〉と特徴付けられる〈目的〉は、順次、実現 (nirvṛtti) という〈行為〉、変容 (vikriyā) という〈行為〉、〈顕現の獲得〉 (ābhāsāpatti) という〈行為〉に対して自主的なもの、すなわち〈行為主体〉である。〔〈目的〉以外の〕他の多くの〈行為主体〉は、そのことを期待することによって〈実現対象〉等の〈目的〉を〔〈行為〉の〕対象とする。したがって、これらの〈目的〉は〔自己の〈行為〉に対する〕自主性に依拠して、〈行為主体〉の〈促進〉 (praiśa) と特徴づけられる実現化作用等といった〈ハタラキ〉に対して〈目的〉となる。なぜなら、〔〈目的〉は〈行為主体〉によって〕そのような〔〈ハタラキ〉を〕通じて最も得ようと望まれるものだからである。

[VP3.7.54.2] tathā hi nirvartate vikurute ābhāsam upaiti prakāśate iti kartāraḥ svavyāpāre karmabhedāt pradhānakartṛvyāpāre vivakṣite nirvartayati, vikārayati, ābhāsādiviśayabhāvam āpādayatīti kartṛpraiśe svāmisanidhāv iva bhṛtyā nyagbhavantaḥ karmabhāvam anubhavanti //54//

すなわち、nirvartate (「実現する」)、vikurute (「変容する」)、ābhāsam upaiti (「顕現を得る」) すなわち prakāśate (「光照する」「顕現する」) と表現される自己の〈ハタラキ〉に対する〈行為主体〉は、〈目的〉の違いに応じて nirvartayati (「実現せしめる」)、vikārayati (「変容せしめる」)、ābhāsādiviśayabhāvam āpādayati (「顕現等という対象性を獲得せしめる」) というように主要〈行為主体〉の〈ハタラキ〉が表現しようと意図される場合、主人が近在している場合の召使い達のように、〔主要なる〕〈行為主体〉の〈促進〉に対して服従するものとなって〈目的〉性を享受する⁷⁷。

⁷⁷ バルトリハリが「〈能成者〉一般論」において次のように述べていることに対応する。

VP3.7.20: guṇakriyāṇām kartāraḥ kartrā

参考文献・略号

A: Pāṇini's *Aṣṭādhyāyī*.

Abhyankar, Kashinath Vasudev

1962–72 *The Vyākaraṇa-mahābhāṣya of Patañjali*, edited by F. Kielhorn, third edition, revised and furnished with additional readings, references and select critical notes by K. V. Abhyankar. 3 vols. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute. 1: 1962; 2: 1965; 3: 1972.

赤松 明彦

1998 『古典インドの言語哲学1 ブラフマンとことば』(東洋文庫 637) 平凡社

Kielhorn, Lorenz Franz

1980–85 *The Vyākaraṇa-mahābhāṣya of Patañjali*. 3 vols. Bombay Sanskrit and Prakrit Series, 18-22, 28-30. Bombay: Government Central Press. 1: 1880, 2: 1883, 3: 1885; reprint: Osnabrück: Zeller, 1970. 2nd edition: 1: 1892, 2: 1906, 3: 1909. 3rd edition: see K. V. Abhyankar [1962–72].

KV: *Kāśikāvṛtti*: Vāmana and Jayāditya's *Kāśikāvṛtti*. See Miśra [1985].

MBh: Patañjali's *Vyākaraṇamahābhāṣya*. See Abhyankar [1962–72].

Miśra, Śrīnārāyaṇa

1985 *Kāśikāvṛtti of Jayāditya-Vāmana, along with Commentaries Vivaraṇapañcikā?Nyāsa of Jinendrabuddhi and Padamañjarī of Haradatta Miśra*. 6 vols. Ratnabharati Series 5–10. Varanasi: Ratna Publications.

Ogawa, Hideyo (小川 英世)

2000 「バルトリハリの〈能成者〉論」『インドの文化と論理 戸崎宏正博士古希記念論文集』(九州大学出版会) 533–584

2005 “What is *bhāva*?: a grammatical analysis of the term *bhāva*.” 『比較論理学研究』 3, 107–115.

Padamañjarī: Haradatta's *Padamañjarī*. See Miśra [1985].

Pradīpa: Kaiyaṭa's *Pradīpa*. See Vedavrata.

Prakāśa: Helārāja's *Prakāśa*. See Subramania Iyer.

Raghunātha Śarmā (Sharmā)

nyakkṛtaśaktayaḥ / nyaktāyām api saṃpūrṇaiḥ svair vyāpāraiḥ samanvitāḥ // (「〈従属的行為〉 (guṇakriyā) の〈行為主体〉は、〔主要な〕〈行為主体〉によってその〔自主性〕 (svāntarya) という〈行為主体〉の〔能力〕が抑圧されている。しかし、〔その〈能力〉は〕抑圧されていても、十全に自己の〈ハタラキ〉を具えている」)

VP3.7.21: karaṇatvādibhir jātāḥ kriyābhedaṇupātibhiḥ / svāntaryam uttaram labdhvā pradhāne yānti kartṛtām // (「その〔従属的行為〕の〈行為主体〉は、〔どんな〕個別的な〈行為〉〔を有しているか〕に応じて、〈手段〉などとして知られる。それは〔具体的に使用されて〕はじめて〔自己の〈ハタラキ〉に関して〕〈自主性〉を得て、〈主要行為〉に相関した〈行為主体〉〔すなわち〈行為参与者〉〕となる」) 小川 [2000:553] を見よ。

- 1979 *Vākyapadīyam, Part III, vol. 2 (Bhūyodravya, Guṇa, Dik, Sādhana, Kriyā, Kāla, Puruṣa, Saṅkhyā, Upagraha and Liṅga Samuddeśa) with the Commentary Prakāśa by Helārāja and Ambākartrī by Pt. Raghunātha Śarmā.* Sarasvatī Bhavana Grantha-mālā, 91. Varanasi: Sampurnanand Sanskrit University.

Rau, Wilhelm

- 1977 *Bhartr̥hari's Vākyapadīya: Die Mūlakārikās nach den Handschriften herausgegeben und mit einem Pāda-Index versehen.* Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes XLII, 4. Wiesbaden: Franz Steiner Verlag.

Subramania Iyer, K. A.

- 1963 *Vākyapadīya of Bhartr̥hari with the Commentary of Helārāja, Kāṇḍa III, Part I.* Deccan College Monograph Series 21. Poona: Deccan College.
- 1966 *Vākyapadīya of Bhartr̥hari with the Commentaries Vṛtti and Paddhati of Vṛṣabhadeva.* Deccan College Monograph Series 32. Poona: Deccan College.
- 1983 *The Vākyapadīya of Bhartr̥hari (An Ancient Treatise on the Philosophy of Sanskrit Grammar), Containing the Tīkā of Puṇyārāja and the Ancient Vṛtti, Kāṇḍa II, with a Foreword by Ashok Aklujkar.* Delhi: Motilal Banarsidass.

Uddyota: Nāgeśa' *Uddyota*. See Vedavrata.

Vedavrata

- 1962–63 *Śrībhagavat-patañjali-viracitaṃ Vyākaraṇa-Mahā-bhāṣyam (Śrī-kaiyaṭa-kṛta-pradīpena nāgojībhāṭṭa-kṛtena-bhāṣya-pradīpodyotena ca vibhūṣitaṃ).* 5 vols. Gurukul Jhajjar (Rohatak): Hairyaṇā-Sāhitya-Saṃsthānam.

VP: Bhartr̥hari's *Vākyapadīya*. See Rau.

(おがわ ひでよ、広島大学 [インド哲学])